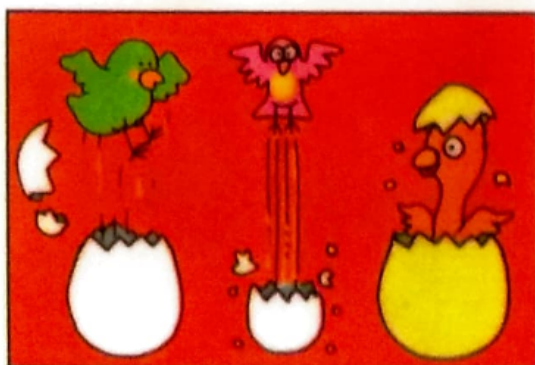
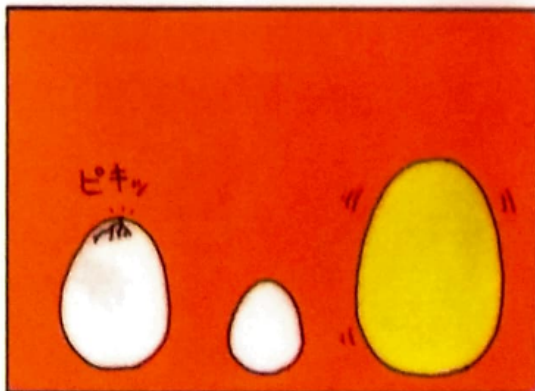
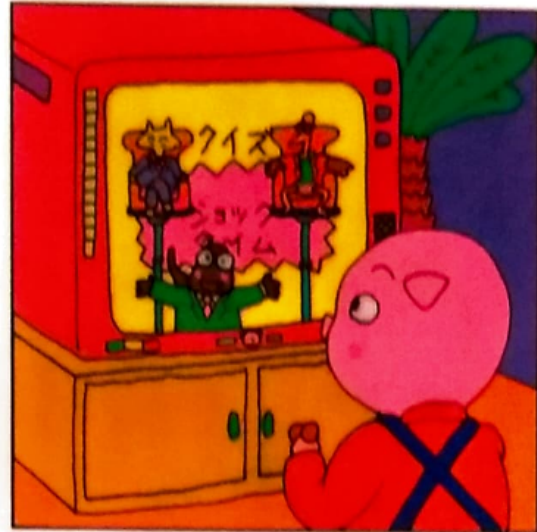
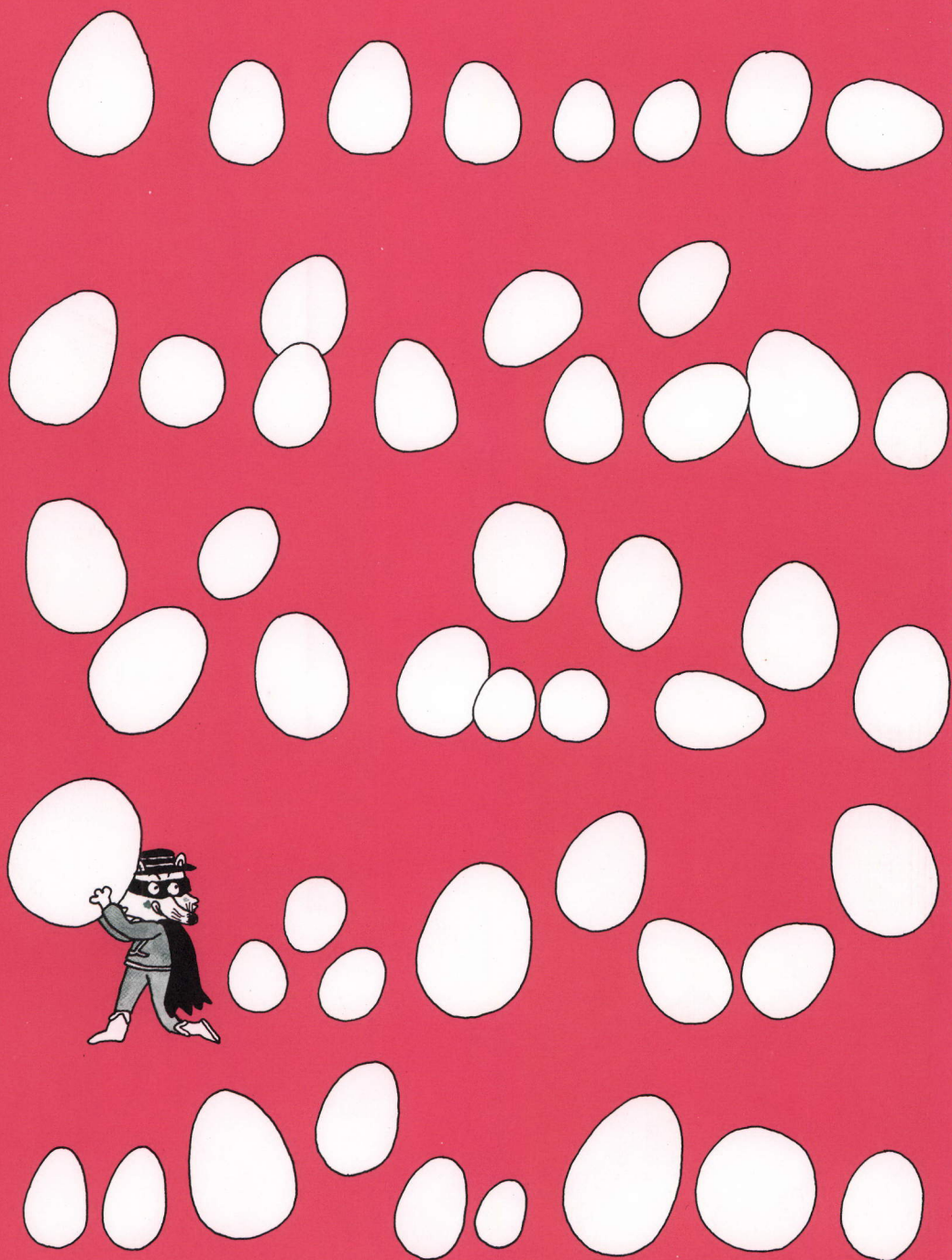
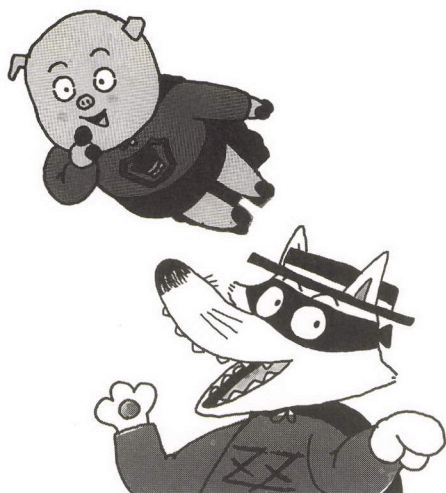
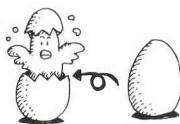
ポプラ社の小さな童話 58
《ほうれんそうマンシリーズ》

- へんし〜んほうれんそうマン
- ほうれんそうマンよいこの1年生
- ほうれんそうマンのおばけやしき
- ほうれんそうマンのじどうしゃレース
- ほうれんそうマンのようかいじま
- ほうれんそうマンのようかいがっこう
- ほうれんそうマンのゆうれいじょう
- かいけつゾロリのドラゴンたいじ
- かいけつゾロリのきょうふのやかた
- かいけつゾロリのまほうつかいのでし
- かいけつゾロリの大かいぞく
- かいけつゾロリのゆうれいせん
- かいけつゾロリのチョコレートじょう
- かいけつゾロリの大きょうりゅう
- かいけつゾロリのきょうふのゆうえんち
- かいけつゾロリのママだ〜いすき
- かいけつゾロリの大かいじゅう
- かいけつゾロリのなぞのうちゅうじん
- かいけつゾロリのきょうふのプレゼント
- かいけつゾロリのなぞなぞ大さくせん
- かいけつゾロリのきょうふのサッカー
- かいけつゾロリつかまる!!
- かいけつゾロリとなぞのひこうき
- かいけつゾロリのおばけ大さくせん
- かいけつゾロリのにんじゃ大さくせん
- かいけつゾロリけっこんする!?
- かいけつゾロリ大けっとう！ゾロリじょう
- かいけつゾロリのきょうふのカーレース
- かいけつゾロリのきょうふの大ジャンプ
- かいけつゾロリの大金もち
- かいけつゾロリのテレビゲームききいっぱつ
- かいけつゾロリのきょうふの宝さがし
- かいけつゾロリちきゅうさいごの日

ポプラ社の小さな童話58

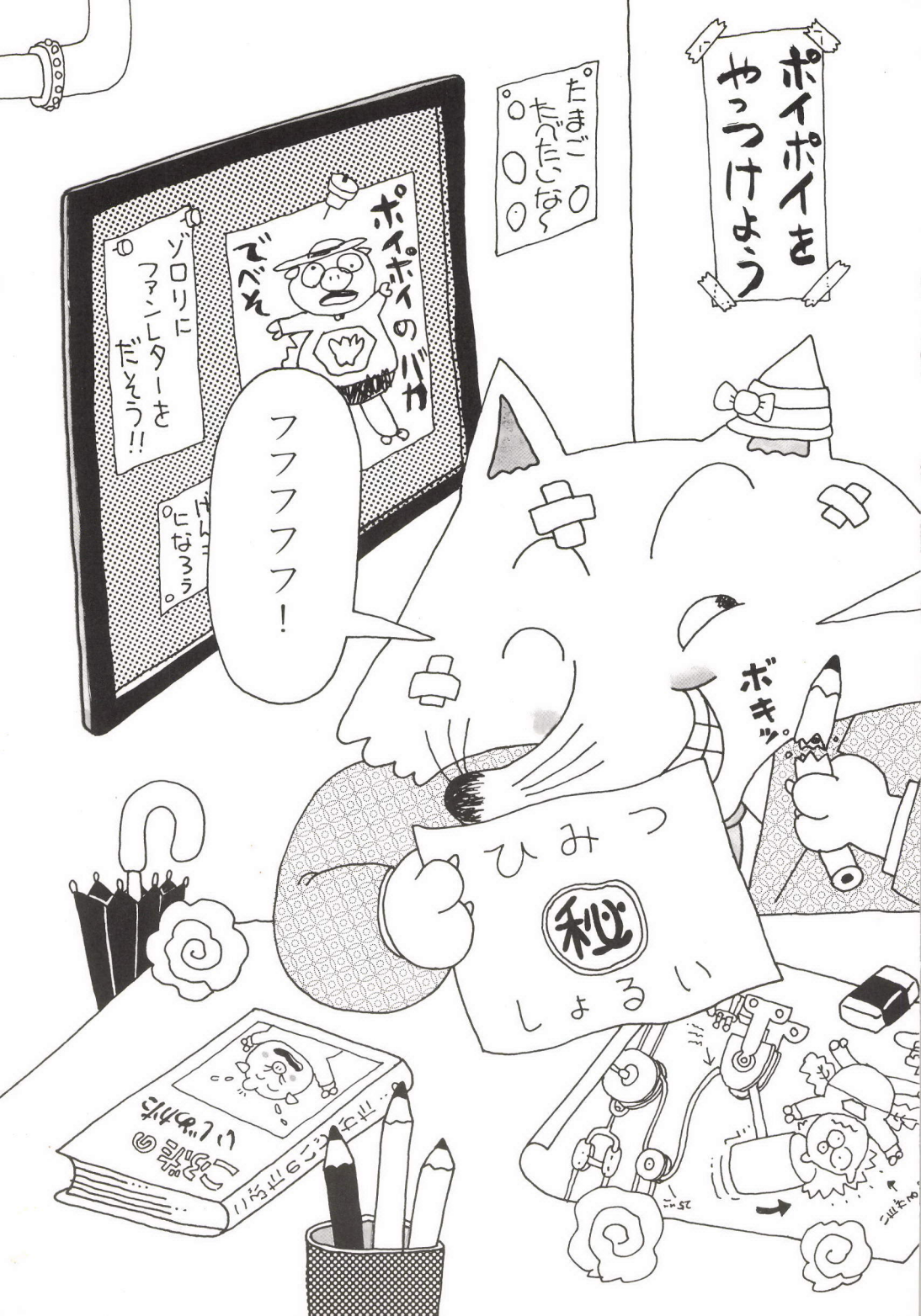
へんし〜んほうれんそうマン

一九八四年十一月　第1刷
二〇〇二年十二月　第26刷

作家　みづしま志穂
画家　原　ゆたか
発行者　坂井宏先
発行所　株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町五　〒一六〇-八五六五
TEL　〇三—三三五七—二二一六（編集）
〇三—三三五七—二二一三（営業）
〇三—三三五七—二二一一（受注センター）
FAX　〇三—三三五九—二三五九（ご注文）
振替　〇〇一四〇—三—一四九二七一
印刷　瞬報社写真印刷株式会社
製本　島田製本株式会社

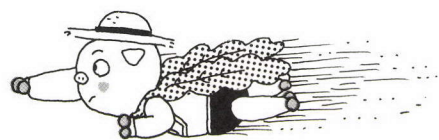
913　みづしま志穂
へんし〜ん　ほうれんそうマン
ポプラ社　2002
78p　22cm
ポプラ社の小さな童話58

ISBN 4-591-01587-4

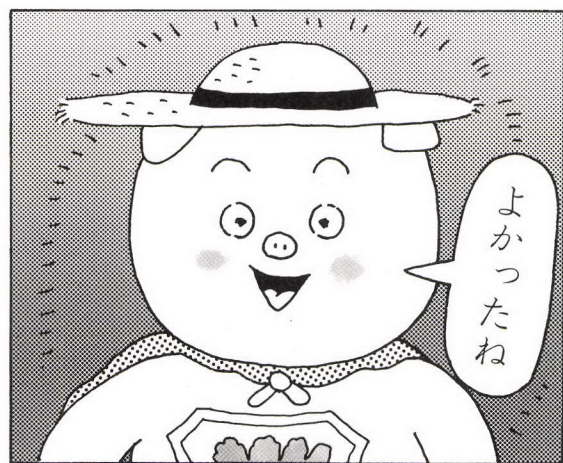
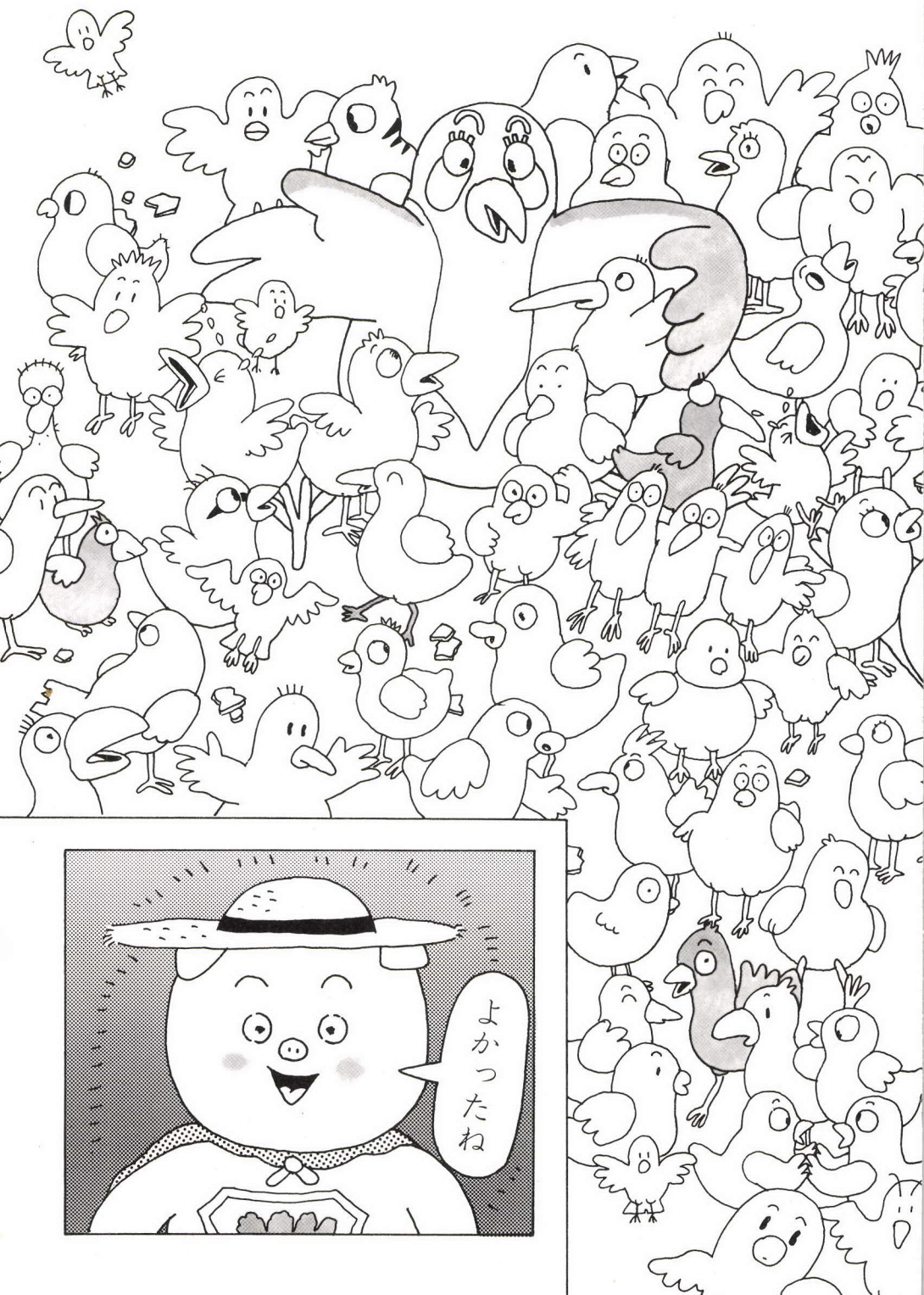
●作家紹介
みづしま志穂（みづしましほ）
一九五二年、鹿児島県に生まれる。九州女子大学卒業。「つよいぞポイポイきみはヒーロー」で第七回毎日童話新人賞「好きだった風　風だったきみ」で第三十二回毎日児童小説賞を受賞する。今後の活躍が期待される。

●画家紹介
原ゆたか（はらゆたか）
一九五三年、熊本県に生まれる。七四年KFSコンテスト・講談社児童図書部門賞受賞。主な作品に、「ちいさなもり」「マータンはまさおくん」「てぶくろロケットの宇宙探険」「たからのげた」「ぷうのおつかい」「ぼくのもおとうさんみたいになるのかな」などがある。

ポイポイをやっつけよう
たまごたべたいな〜
ポイポイのバカでべそ
ゾロリにファンレターをだそう!!
フフフフフ!
ボキッ
ひみつ
㊙
しょるい
こぶたのいじめかた

ポイポイ
なんか
きらいだ
ポイポイを
やっつける　ほうほうを
みつけたぞ。
かいけつゾロリの
ビタミン
かいけつゾロリ
だいかつやく
ママ
カサカサカサカ

ポイポイ

「いつでも　この　ほうれんそうマンが、あいてに
なってやるぞ！　せいぎは　つよいのだ。うん！」
ほうれんそうマンは、ゆう日に　てらされて、
ポーズを　とりました。
それが、左の　サインいりの　しゃしんです。
さて　つぎは　どんな　さくせんを、
かいけつ　ゾロリは　たててくるでしょう。
まけるな　ほうれんそうマン！
つよいぞ　ほうれんそうマン！

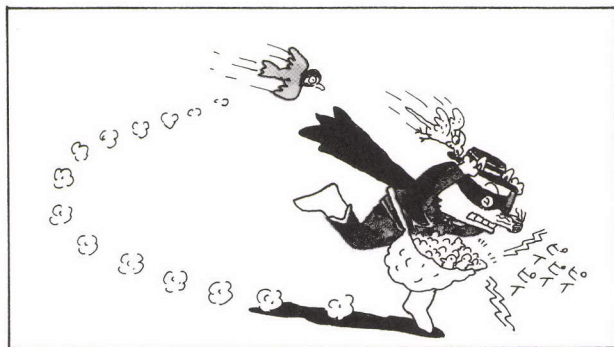
おぼえていろよ

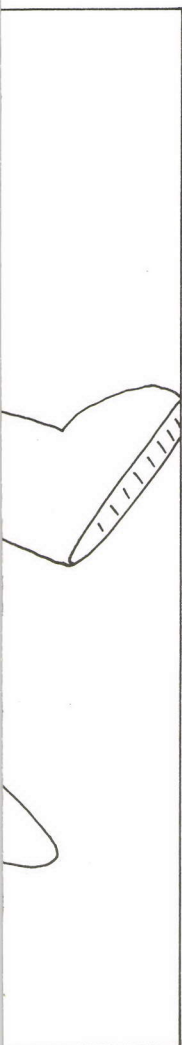
いやはや、ひゃくわの　ひなたちの　元気なこと。
かいけつ　ゾロリは、からっぽに　なった
ポケットを　ひらひら　させながら、
「うひひ、ははは、たすけてくれーっ！」
と、こんどは　ほんとの　カンガルーみたいに、
ぴょん　ぴょん　とんで、にげていきました。
「おぼえていろよ。ほうれんそうマン、こんどこそ
すごい　さくせんを　たてて、やっつけて
やるからな。」

よかったね

「まあ、なんて　たのもしい　子(こ)どもたち。
よく　がんばったねえ。」

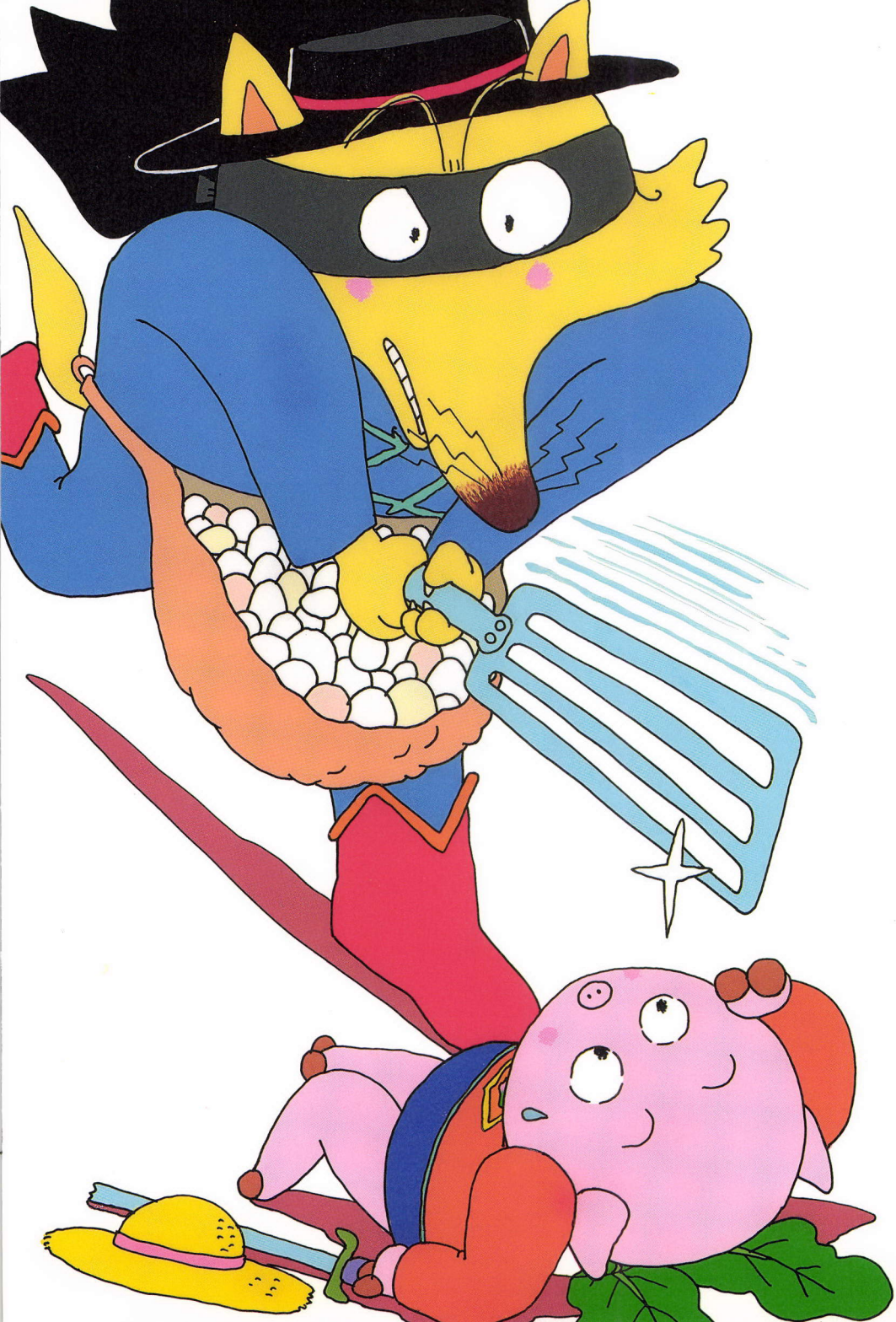
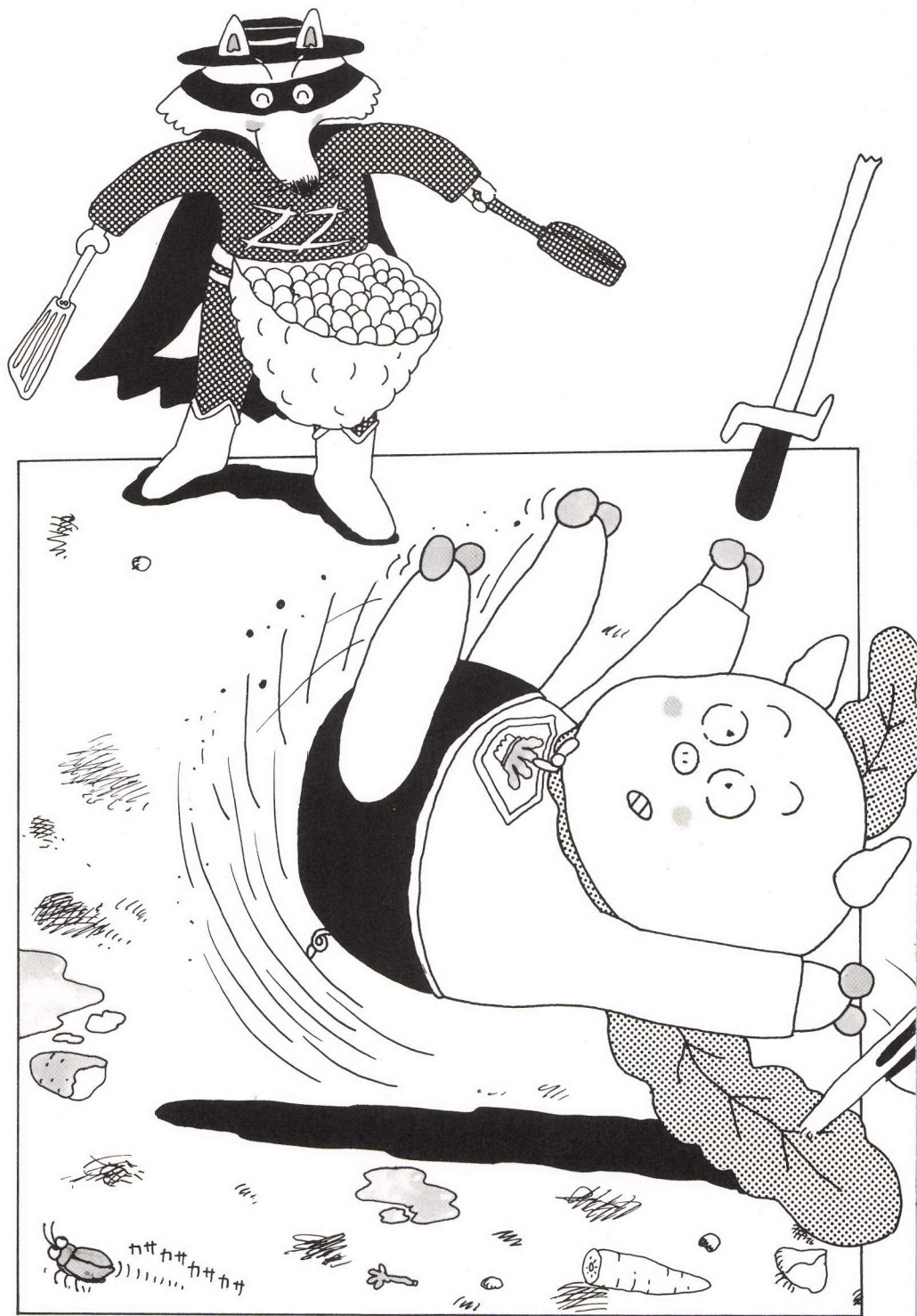
ピイ(ぴい)　ピイ(ぴい)
パア(ぱあ)　パア(ぱあ)
チク(ちく)　チク(ちく)

ピィ
ピィ
ピィピィ

ピィ
ピィ
ピィ

そこへ、ペチャおばさんと　クチャおばさんも
とんできて、かいけつ　ゾロリの　かおを
つっつきました。
「この　大うそつき、やっぱり　おまえは、
わるぎつねだったんだね。」
「テレビを　りようして、だましてさ。」
ペチャおばさんと　クチャおばさんは、ポケット
から、ぜんぶの　ひなを　たすけだしました。

チク
チク
チク チク
チク チク
チク チク

おなかの　ポケットのなかで、とりの　たまごが
ひなに　かえったのです。
ひゃくわの　ひなが、つぎから　つぎへと　かおを
だし、くちばしで　ゾロリの　おなかを
つつきます。
「うひゃあ、これは　たまらん。うふふ　やめろ、
やめてくれ、ひひひ……くすぐったいよ――。
はひふふへへほ……。」
ゾロリは　なみだを　うかべて、あばれます。

きらりと、ゾロリの フライがえしが ひかりました。
と、そのとき、
「ピチチチチ、ピピピ。」
と、かわいい 声が しました。
「な、なんだあ……。」
かいけつ ゾロリが、
なさけなさそうな
声を
だしました。

カサカサカサカサ

「うわあっ！」
ズリッ！
あぶらで　ぎとぎとの　だいどころなので、
なれない　ほうれんそうマンは、ころんでしまいました。
「ひきょうだぞ。　だいどころぐらい、ぴかぴかに
みがいておけっ！」
「ふん、うるさい。　それも　さくせんだ。　こういう
ことも　あろうかと、ふだんから、だいどころを
よごしておいたんだ。　かくごーっ！」

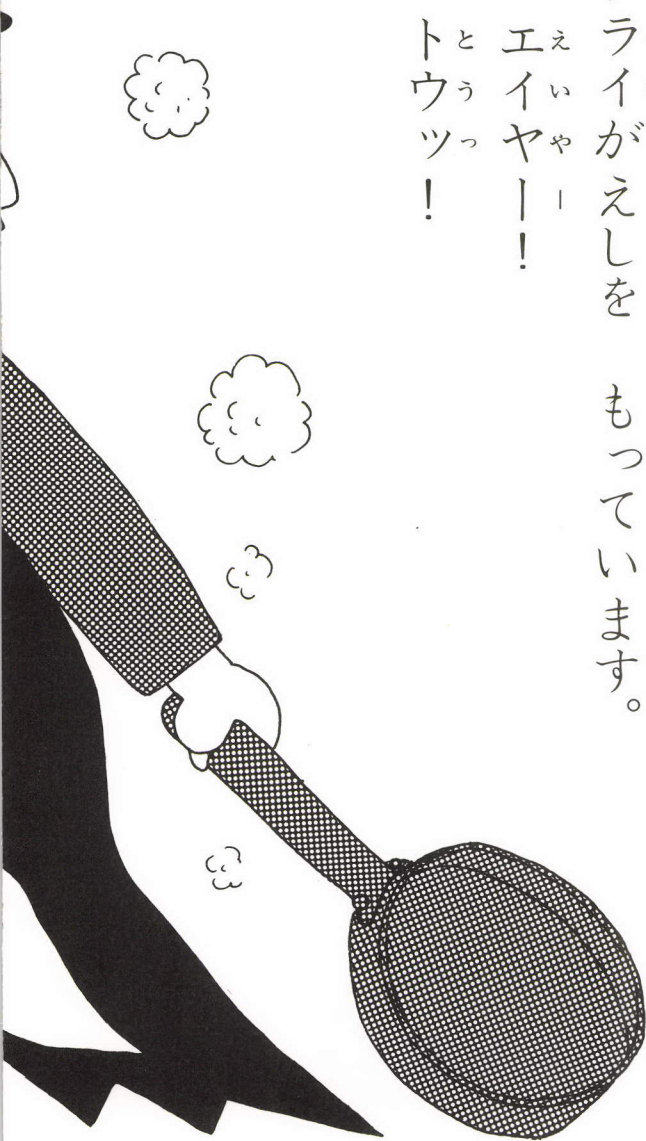
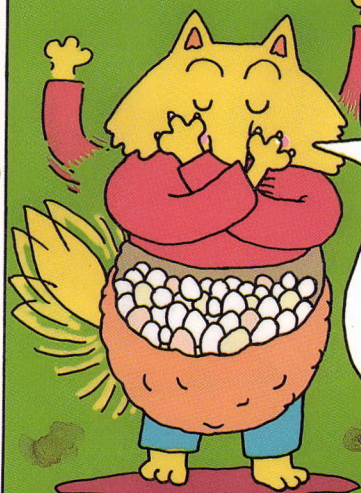
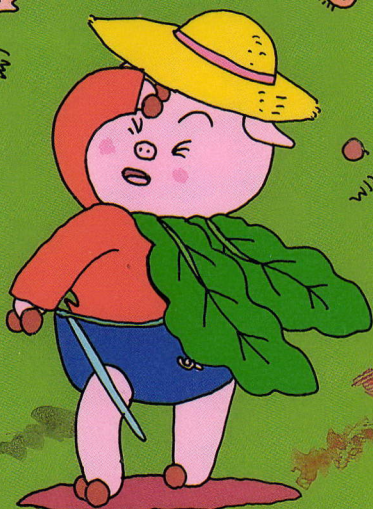
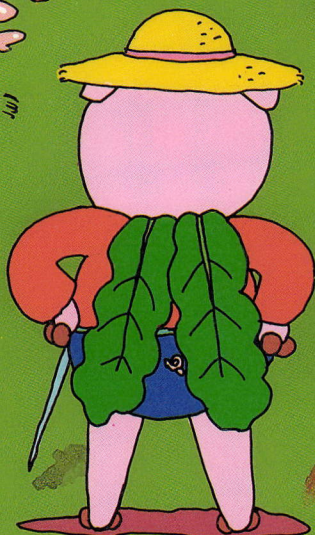
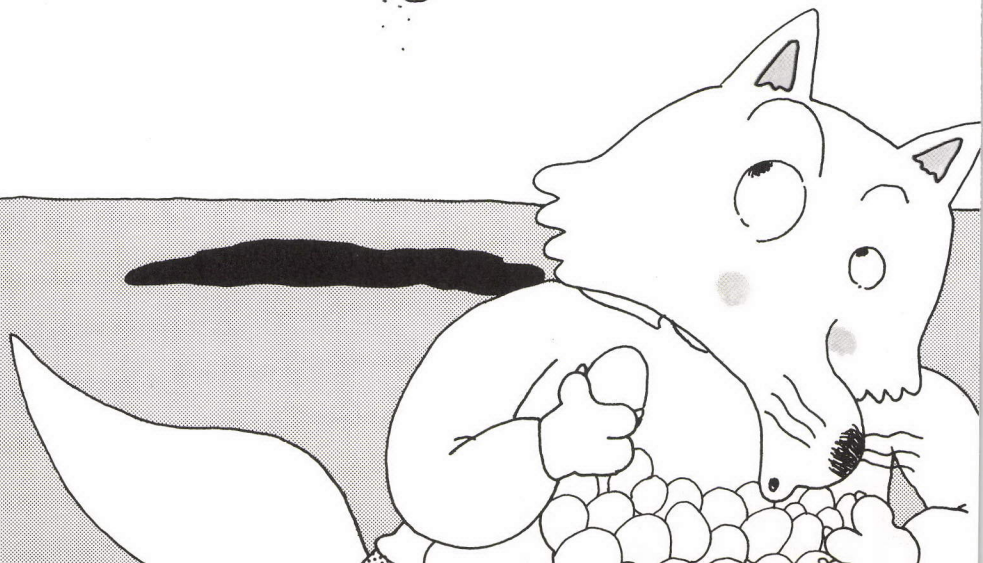
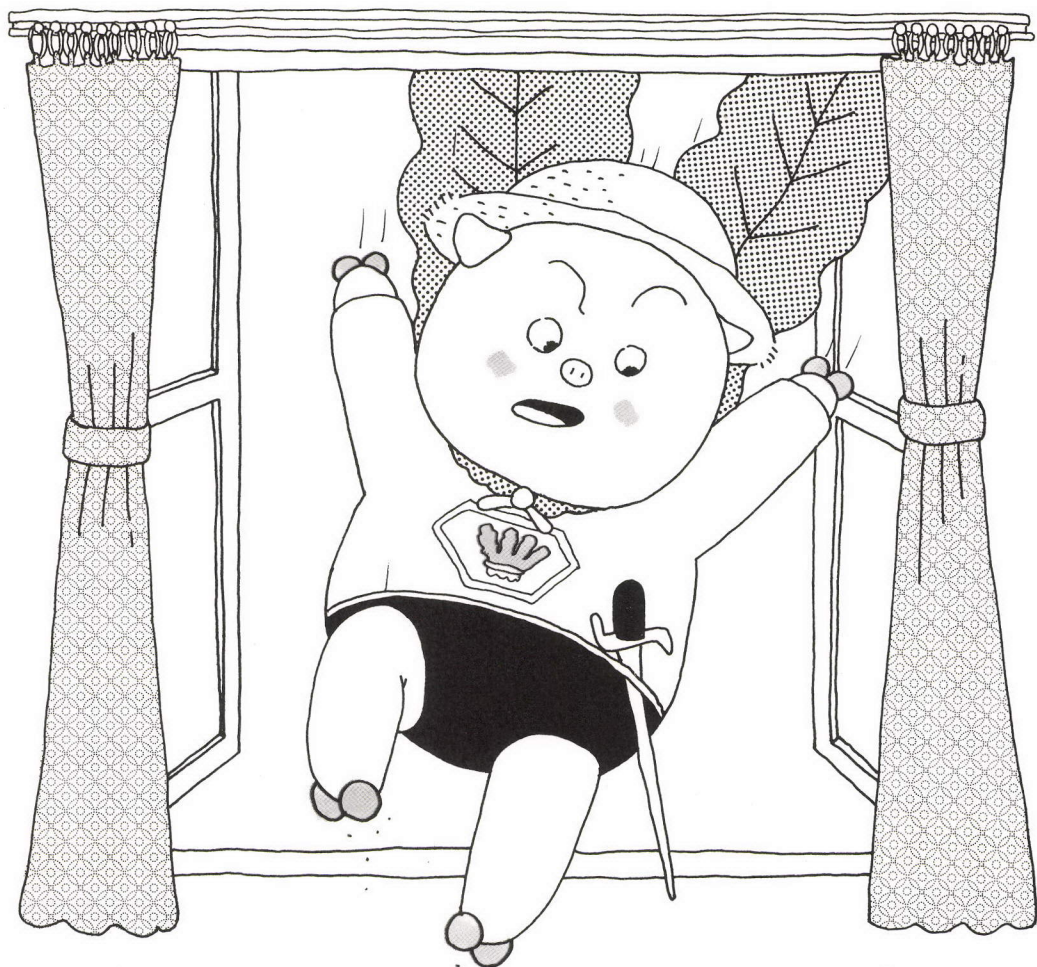
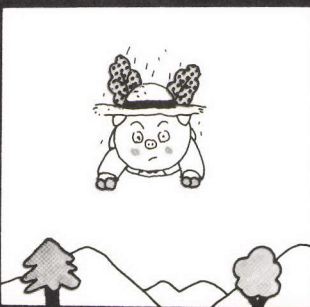
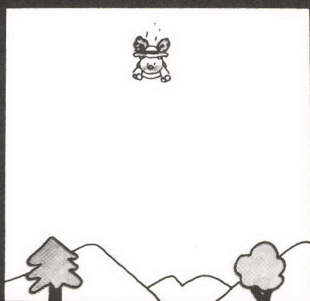
カキーン

カーン
カチーン
でも
サーベルは、
フライパンの
あたって、
ぼろぼろと
はが
こぼれます。

そこに

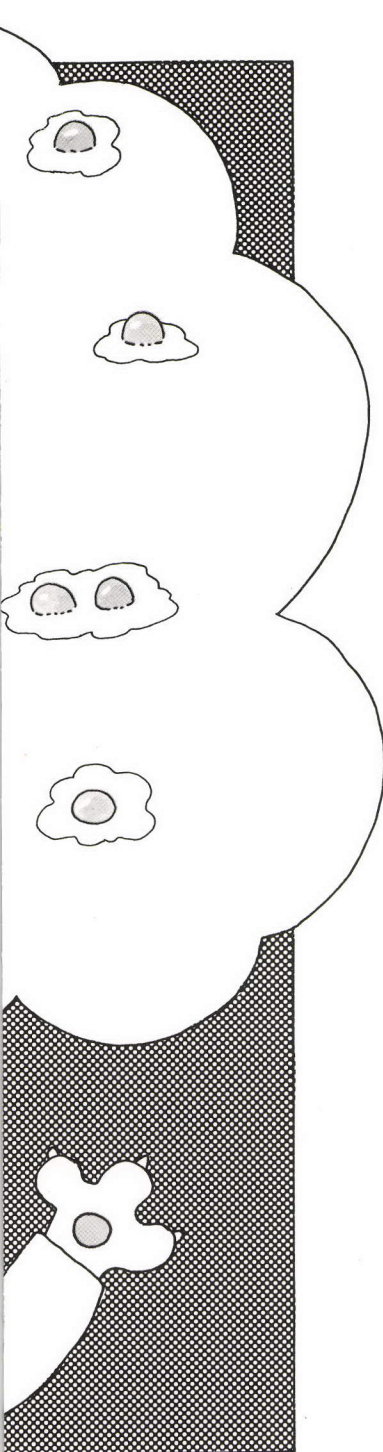
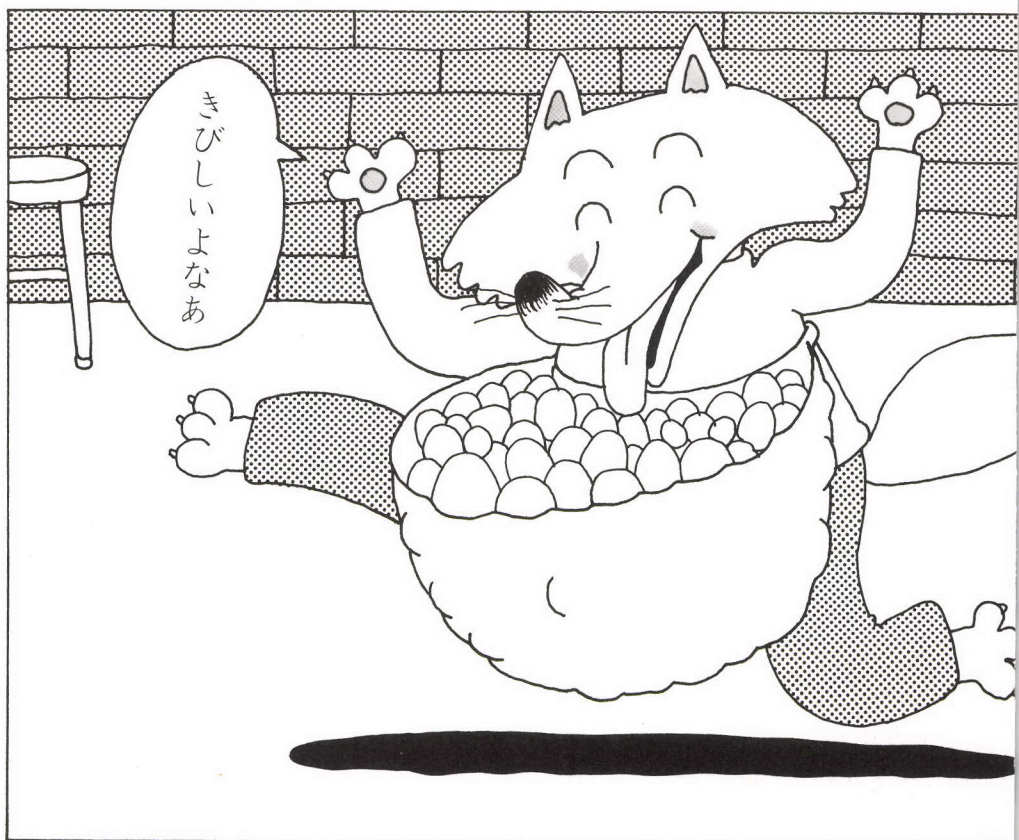
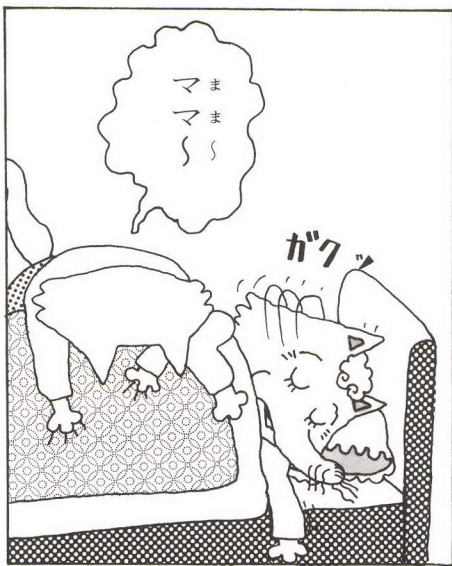
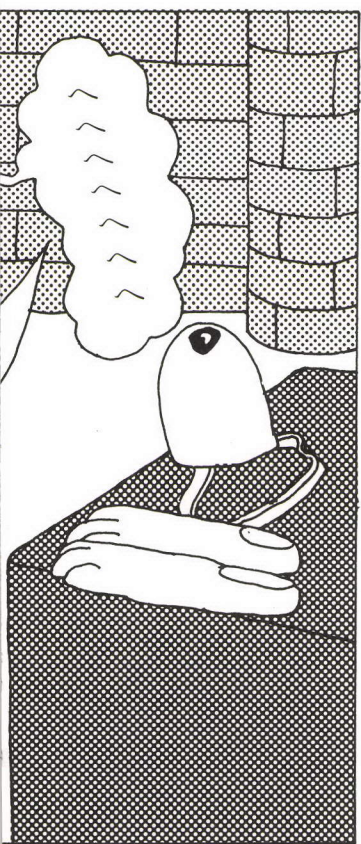
ほうれんそうマン(まん)は、サーベル(さーべる)を
ぬいて、大(おお)きく　きりつけました。

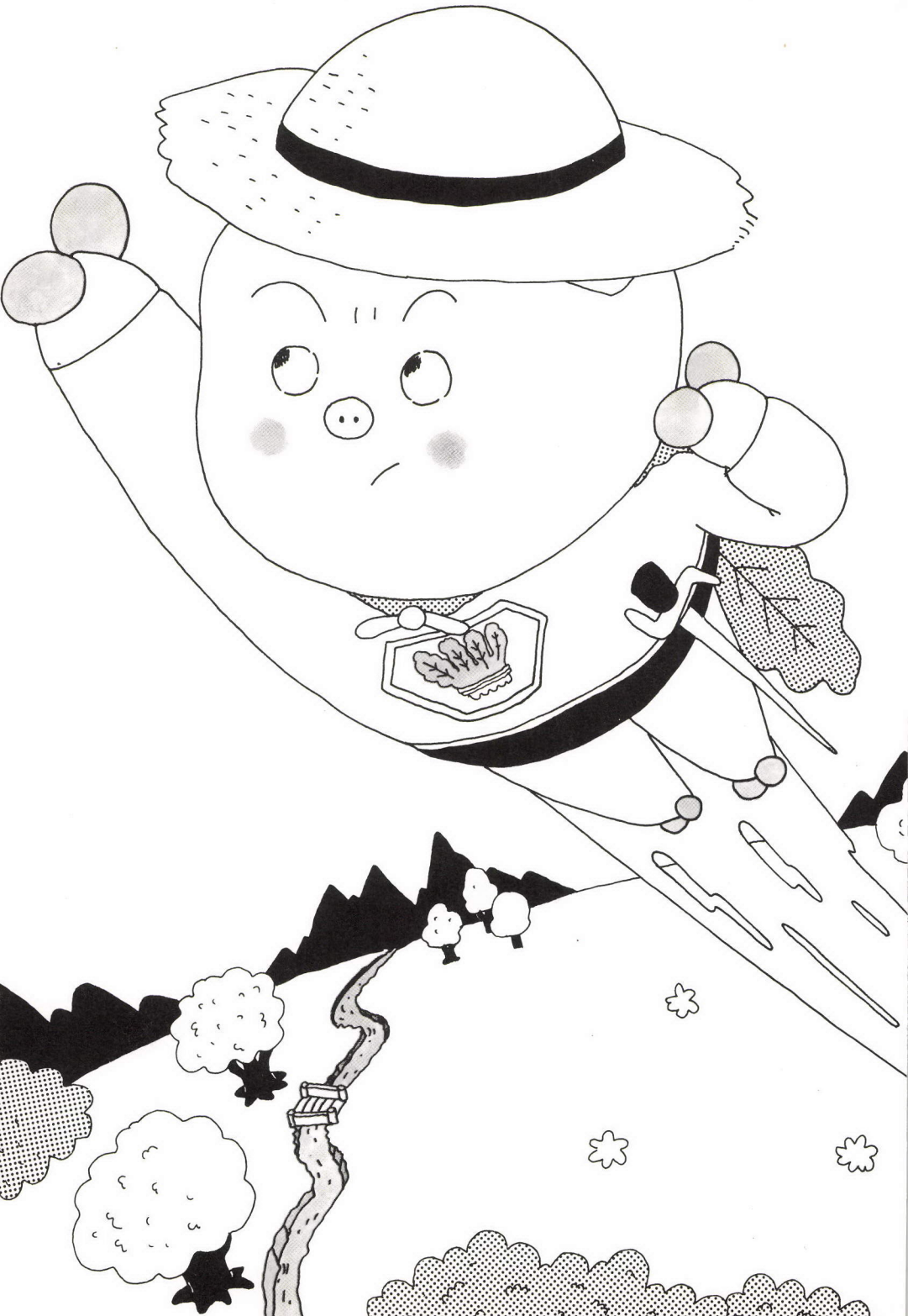
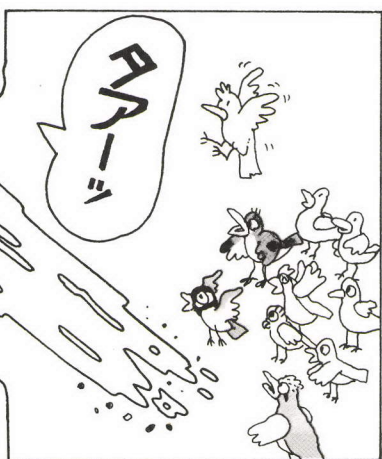
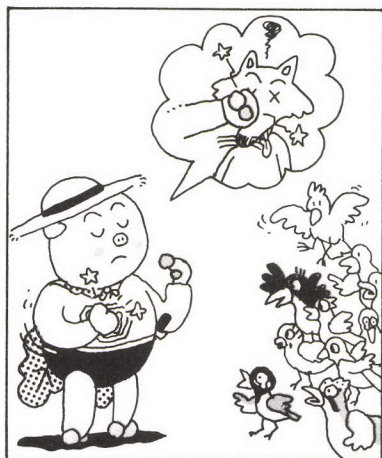
くろめがねに　くろマント、かいけつ　ゾロリに
へんしんしました。
左手に　フライパン、右手には
フライがえしを　もっています。
エイヤー！
トウッ！

ゾロリ　ゾロゾロ
ナム　ゾロリ
トワッチ

「みつけたぞ、ごきぶり　ゾロリ！　じゃ　なかった、
かいけつ　ゾロリ！　たまごを　たべることは、
この　ほうれんそうマンが　ゆるさんぞ。」
ほうれんそうマンは、ピンクの　かおを　まっかに
して、いいました。
「おや、まあ、ブタマン！　じゃ　なかった、
ほうれんそうマン。くるなら　こいっ！」
ゾロリは、また　しっぽを　ぶんぶん　まわし、

だいどころの　まどは、大きく　あいています。
その　まどから、なにかが　とんできました。
「おや、ゴムふうせんが　とんできたぞ。」
いいえ、これこそ　われらの　ヒーロー、
ほうれんそうマンです。

ひゃっこの　めだまやき
こじゅけい　かなりや
いんこさん
なんの　たまごでも
ございます
ひゃっこの　きみと
ひゃっこの　しろみ
パク　パク
パックン
たべまする

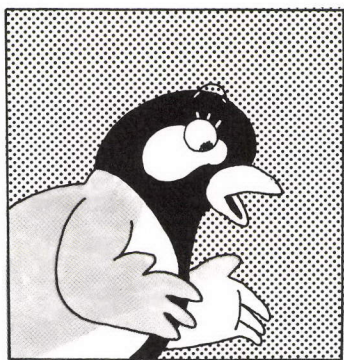
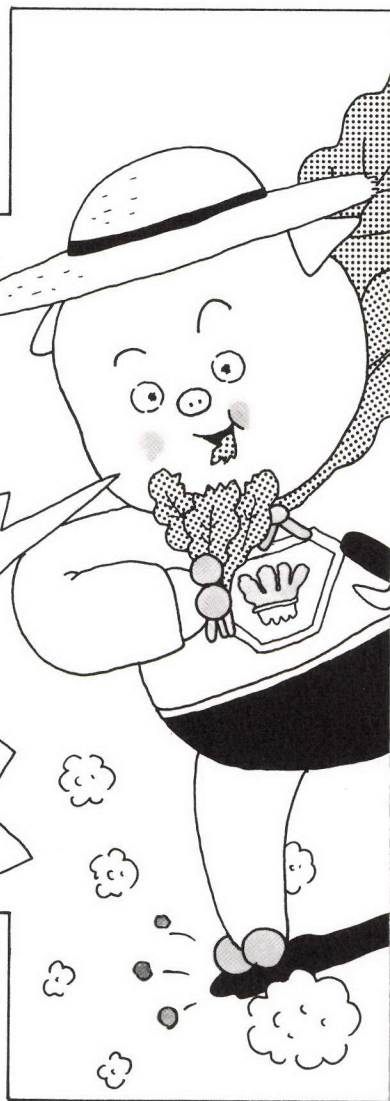
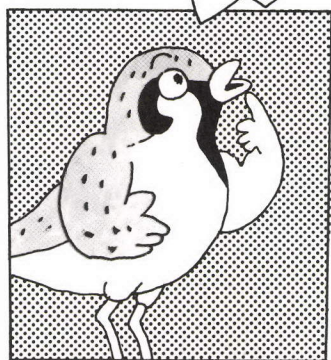
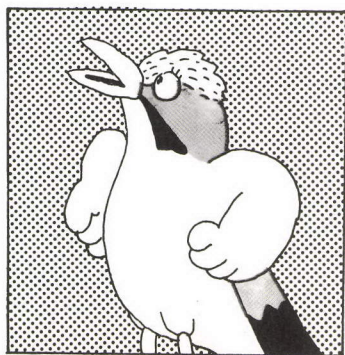
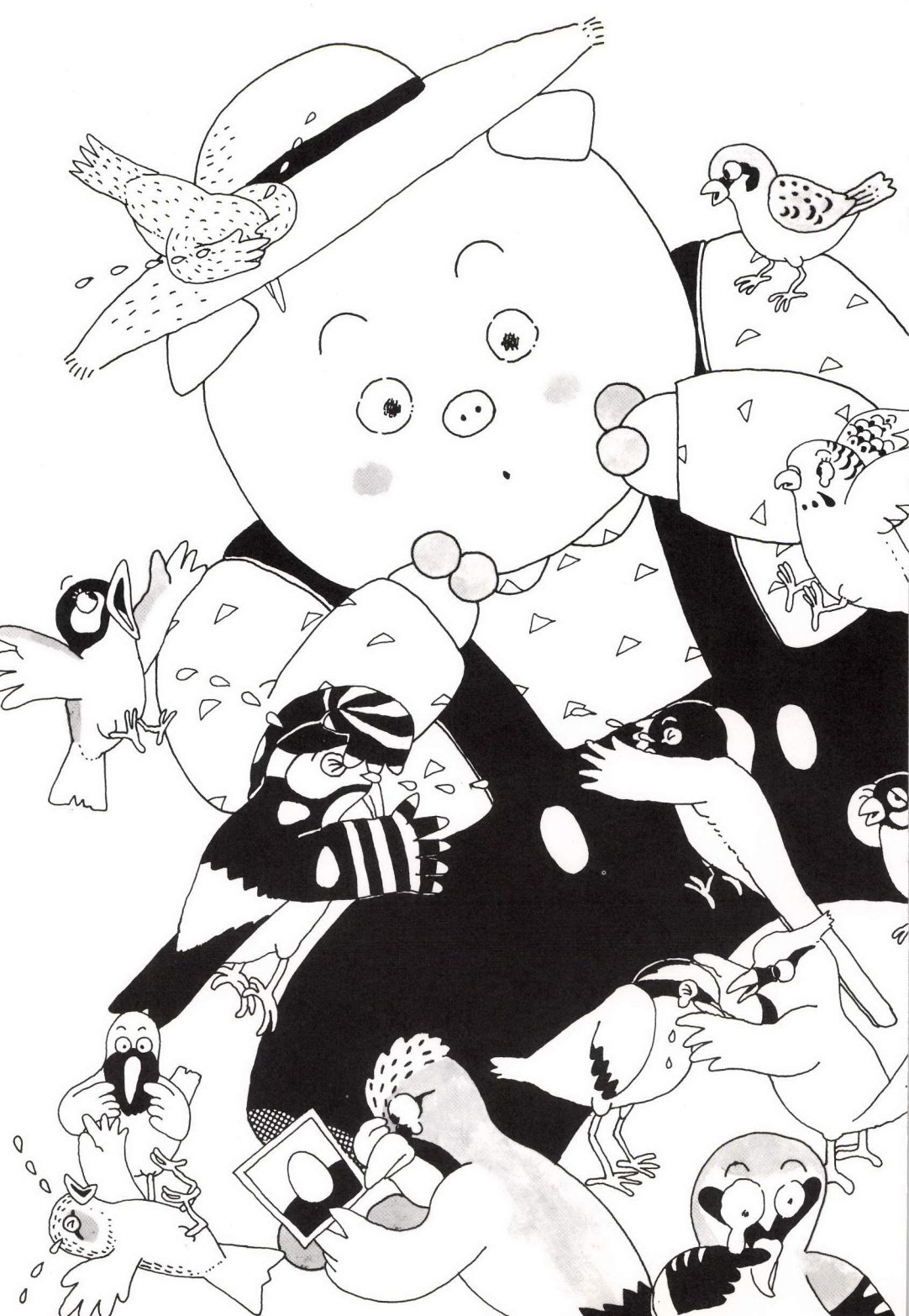
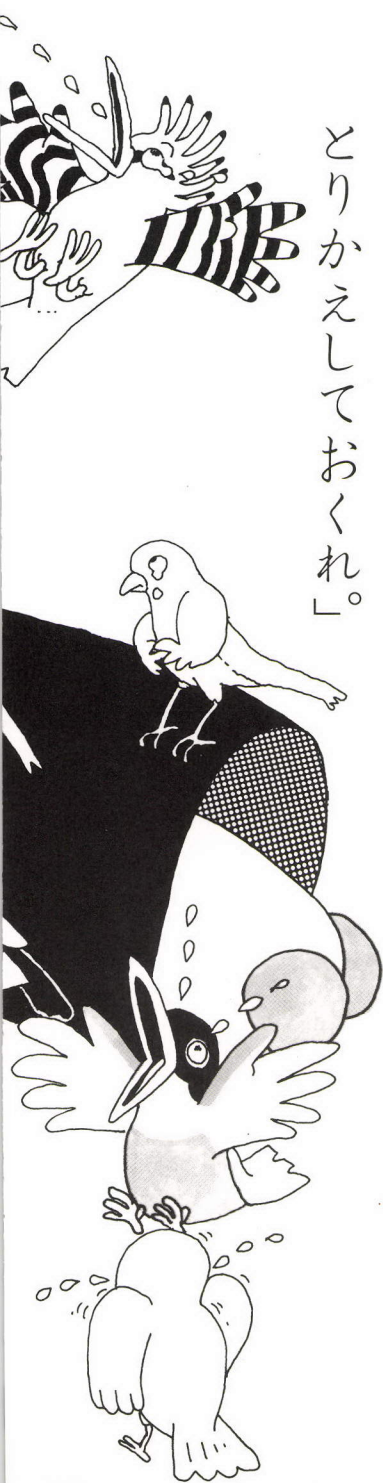
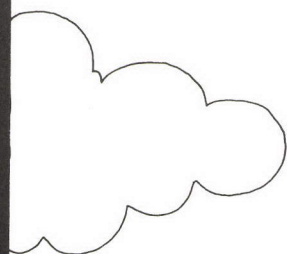
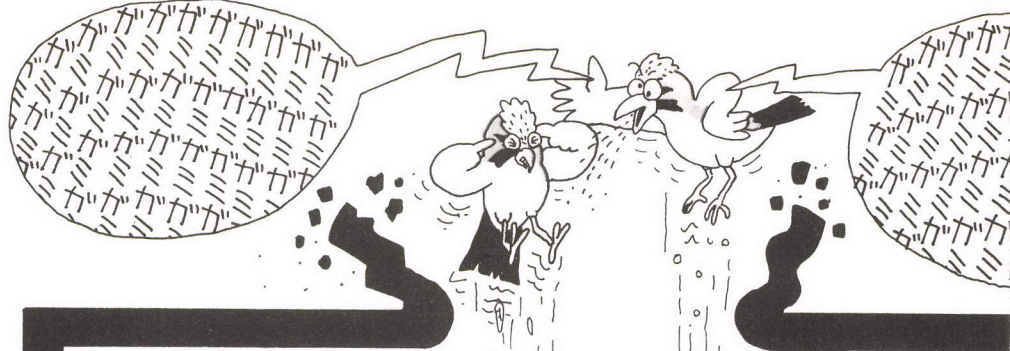
「たまごは、あしたの　たんじょう日まで、
ポケットのなかに　いれたままに　しておこうっと。
どろぼうにでも　ぬすまれたら　たいへんだぞ。」
じぶんが　どろぼうのくせに、そう　つぶやくと、
ゾロリは、こんどは　大きな　フライパンを
ぴっかぴかに　みがきはじめました。

たまごを
100こ
たべるのよ。

ママ〜
ガクッ

きびしいよなあ

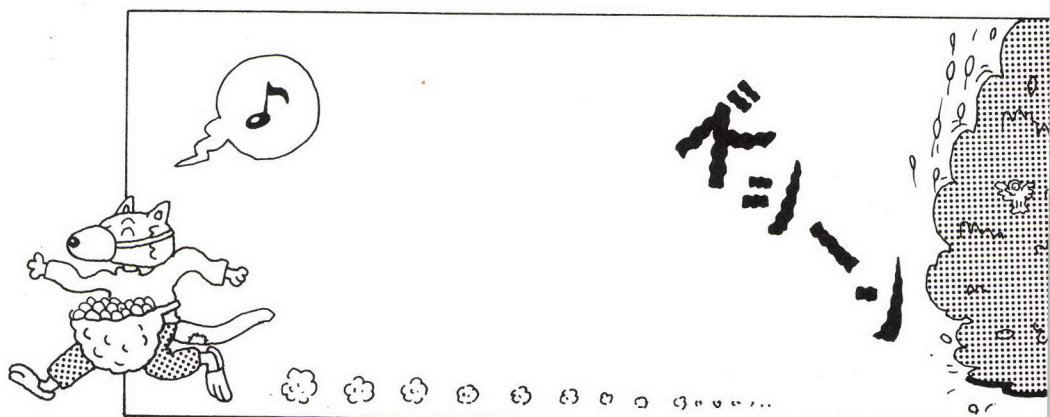
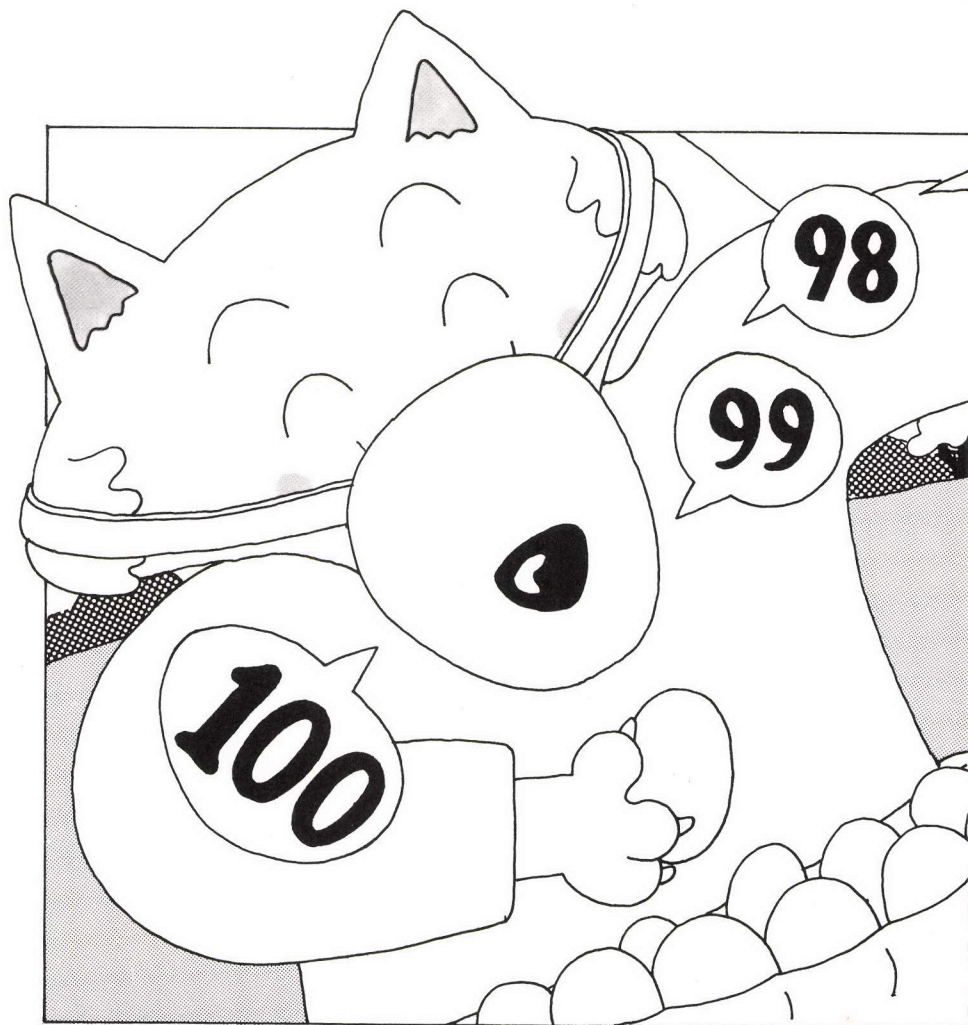
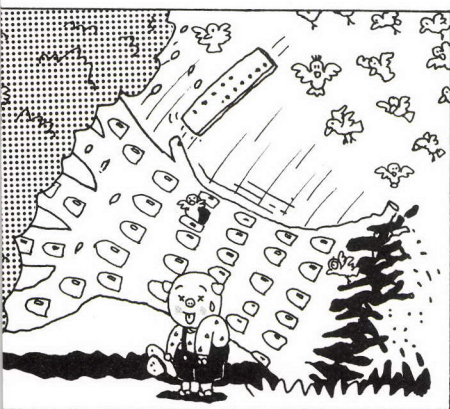
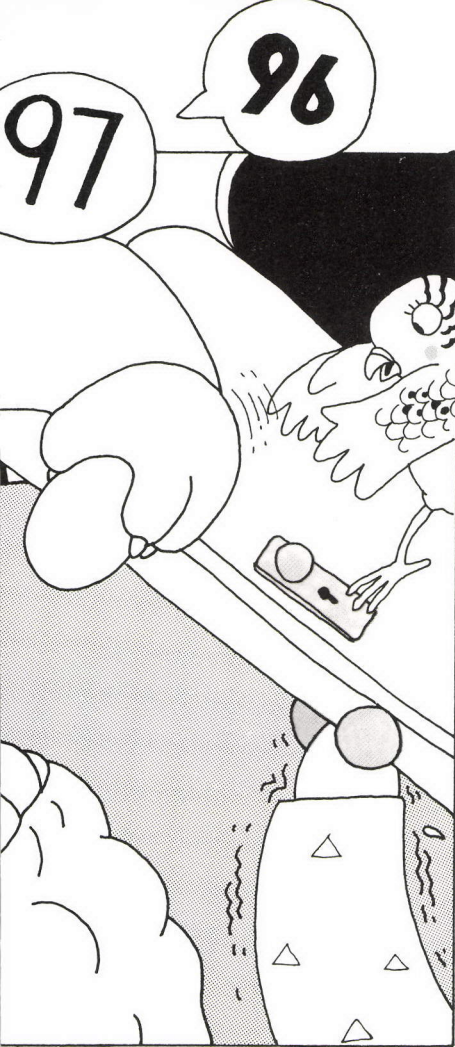
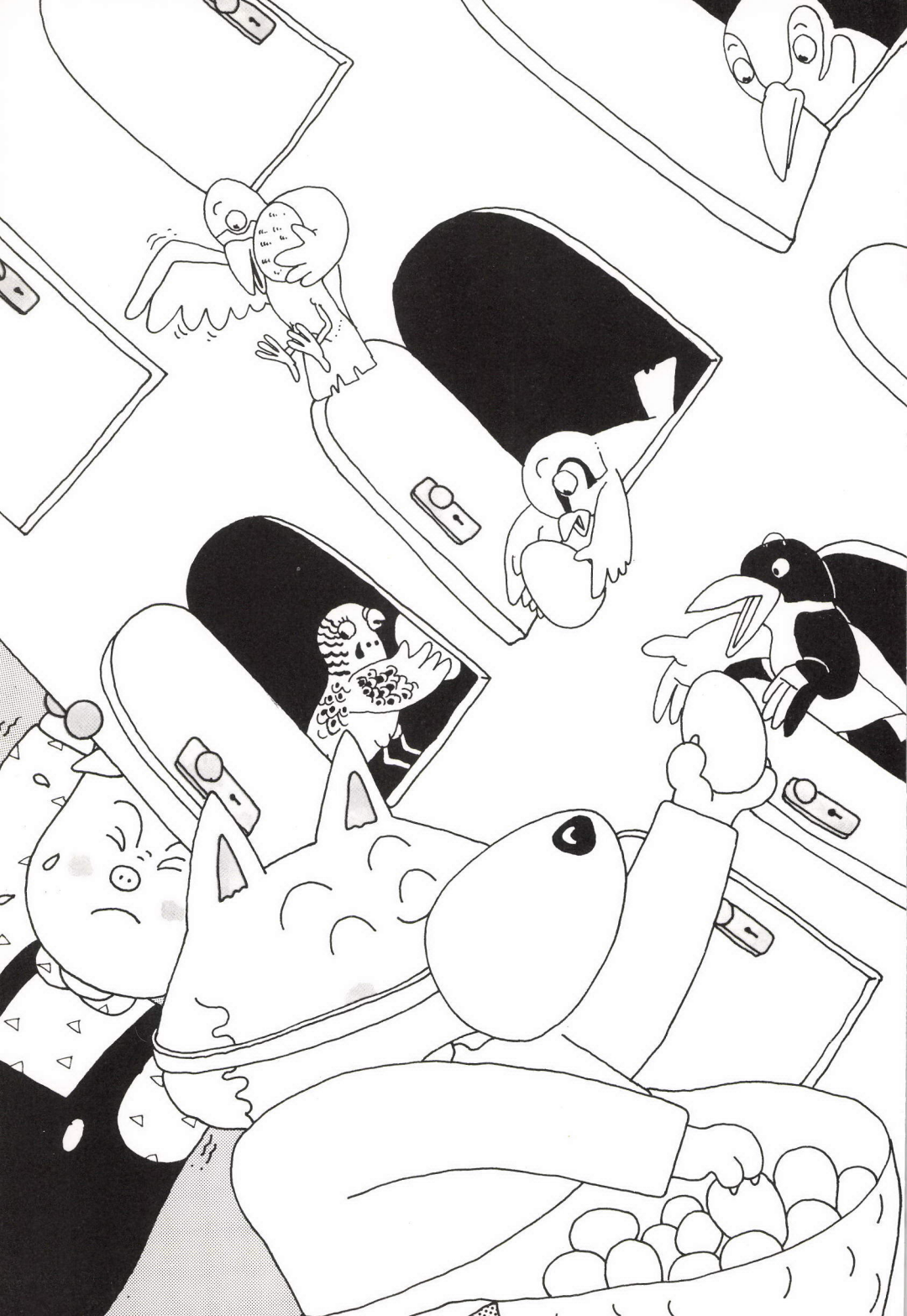
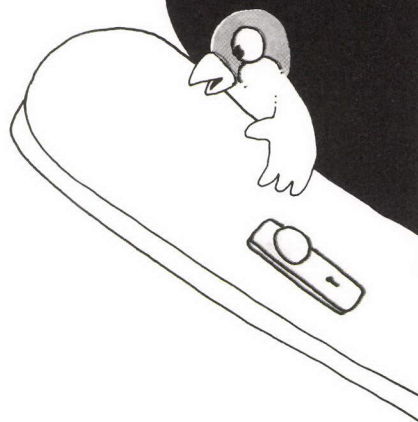
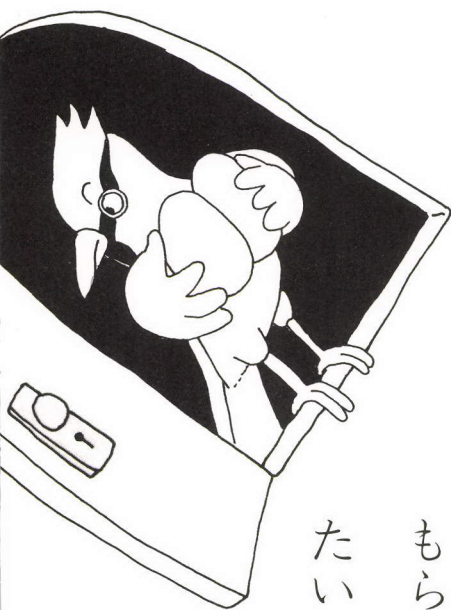
「うひひ、うまく いった。あしたは、ひゃっかいめの
たんじょう日だ。ひゃっかいめの たんじょう日には、
ひゃっこの たまごを たべることと いうのが、
ママの いいつけなんだもん。きびしいよな。」
ゾロリは、ゾロリじょうのなかを、にひにひ
わらいながら、うろうろ しています。

めざす　てきは、　きつねの　あくやく、
〃かいけつ　ゾロリ〃です。
ふわーり
ほうれんそうマンに　なった　ポイポイは、
ふわふわと　ふうせんのように　とんでいきます。

ほうれんそうマーン

ポイポイは、ピンクの　かお、みどりの　マントの
ほうれんそうマンに　へんしんしていました。

ようし！
ポイポイは、ほうれんそうを　たべながら、
（たまごの　みんな、いま　たすけに　いくよ。）
と、つよく　おもいますと、

ことりたちは、やっと　だまされたことに
きづいて、おいおい　なきだしました。
「きつねは、たまごを　ねらっているのが　わかって
いるのに、つい、テレビで　だまされちまって……
しくしく……いい　きつねだと……。」
「ポイポイ、たすけて！　わたしたちの　たまごを
とりかえしておくれ。」

「もう、あんたっ！ なんで いままで
だまってたのさ。キーッ、くやしい。」
きのつよい、かけすの メチャクチャおばさんが、
シャベルナおじさんを、つっつきまわします。
「おら、おめえと ちがって、ひとの わる口
いいたかねえだよ……ぐすん。」
二わの かけすは、けんかを しながら、大空
たかく まいあがって いきます。

「おら、ひとの　わる口（くち）　いいたかねえけんど、
ゆんべの　まよなか、一（いっ）ぴきの　きつねが、木（き）の
ねっこさ　ほじくりかえしてただ。うん。」
と　いいました。

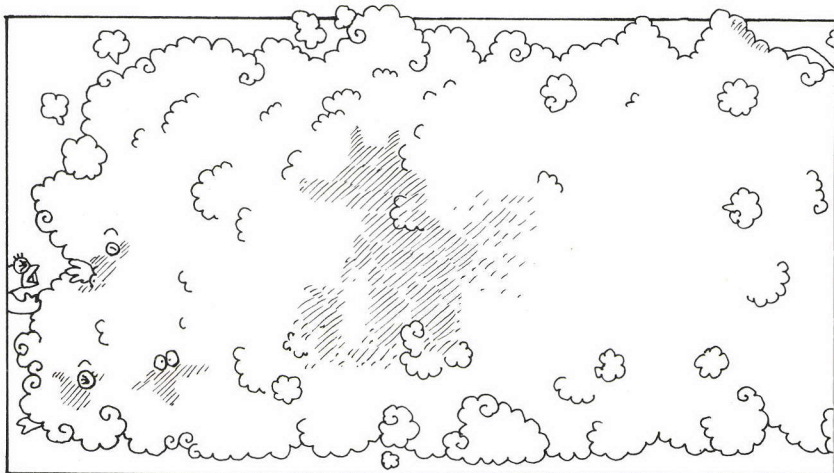
「みんなは　だまされて　いるんだよ。カンガルーなら、
うしろ足で　ぴょん　ぴょん　とぶはずだよ。
ちょこまか　はしったり　しないだろ。」
ポイポイは、たおれた　かしの木を　みて、
いいました。
「ほら、この　木の　ねっこが　ぷつぷつ　きられて
いる。だから、木が　たおれたんだよ。」
きのよわい、かけすの　シャベルナおじさんが、
おどおど　しながら、

98
99
100
ドシーン
♪

「はい　おさないで。九十七(きゅうじゅうしち)、九十八(きゅうじゅうはち)、九十九(きゅうじゅうきゅう)、
ひゃく、と。うひひひっ……。」
ひゃっこの　たまごを　おなかに　いれた
カンガルー(かんがるー)？　は、ちょこまか　はしっていって
しまいました。

しーん
ちょっと　しずかに　なったあと、
「わたしの　たまごを　はこんで。」
「いいえ、あたしの　さきだよ。」
「大きい　じゅんに、はこんで
もらいましょう。」
たいへんな　さわぎに　なりました。

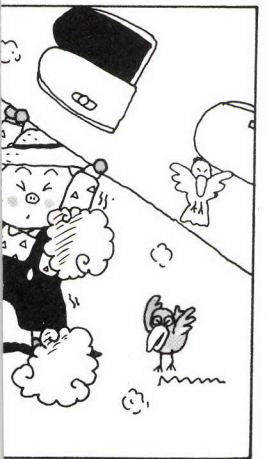
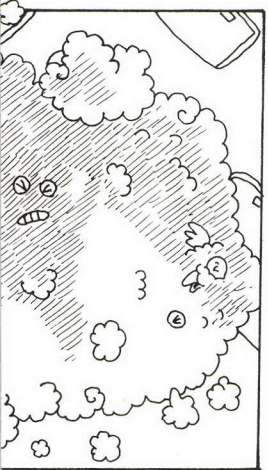
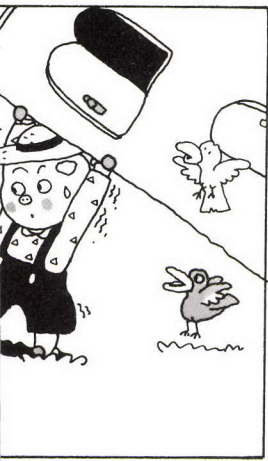
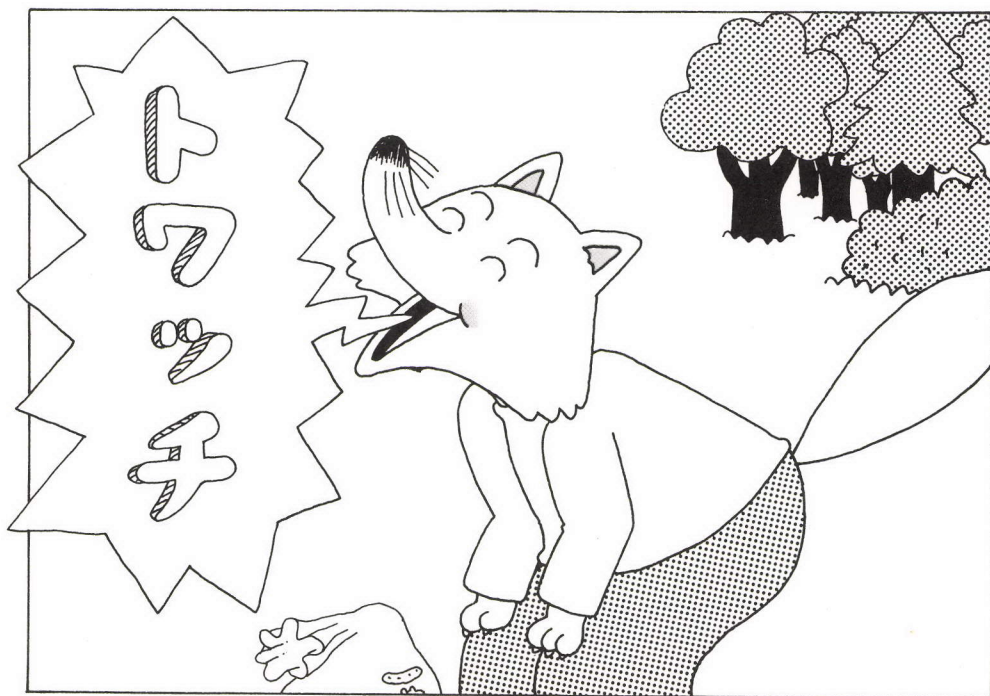
ポイポイは、その　へんてこりんな　どうぶつを、
よくよく　みました。
けれど、どう　みても、きつねが　おなかに
ポケットを　つけただけにしか、みえません。
「しつれいですが、あなたは　きつねでしょう。」
へんてこりんな　どうぶつは、きっぱりと
いいました。
「わたしは　カンガルーです。ゾロリの　ともだち、
うそつかなーい。」

ゾロリが　いたところには、へんてこりんな
どうぶつが　います。
「なんだよ、きみは……？」
ポイポイが、木を　ささえたままで　ききますと、
「ごらんのとおり、わたしは　カンガルーです。
おなかの　ポケットで、たいせつな　たまごを
ほかほかと　あたためながら、はこびます」。
と　いうでは　ありませんか。
きつねの　ゾロリの　すがたは、どこにも　みえません。

ヤ

やがて、ほこりが　おさまると……。

いいながら、しっぽを　ぶんぶん　ふりまわし
はじめました。
すなぼこりが　もくもくと　あがり、ポイポイの
口のなかにも、すなが　はいりこんできます。
「うえーっ、ご、ごほん　ごほん!!」
すなぼこりで、あたりは　ねずみいろ。
なにも　みえません。

ゾロリ　ゾロゾロ
ナム　ゾロリ

トワッチ

ペチャおばさんと　クチャおばさんが、
かわりばんこに　わけを　はなしますと、
「おまかせください！」
ゾロリは　むねを　はって、こたえました。
「さすが　ゾロリさんだわ。あとで　サインして
もらおうかしら。」
「しーっ、しずかに、ごほん、では……。」
ゾロリは、うなっている　ポイポイには
かまわずに、きどって　せきばらいを　すると、

いるのに、ゾロリ(ぞろり)は
すまして
そう　たずねます。

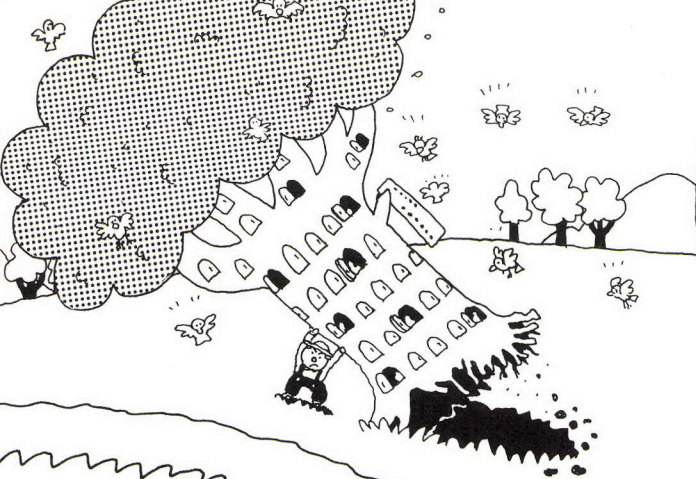
「あっ、ゾロリさんだわ。パパタパタぼうやに　ハワイりょこうを　プレゼントなさった　やさしいかたよ。」

「きっと　ゾロリさんなら、たすけてくださるわ。だって、わたしたち　ことりの　みかたですもの。」

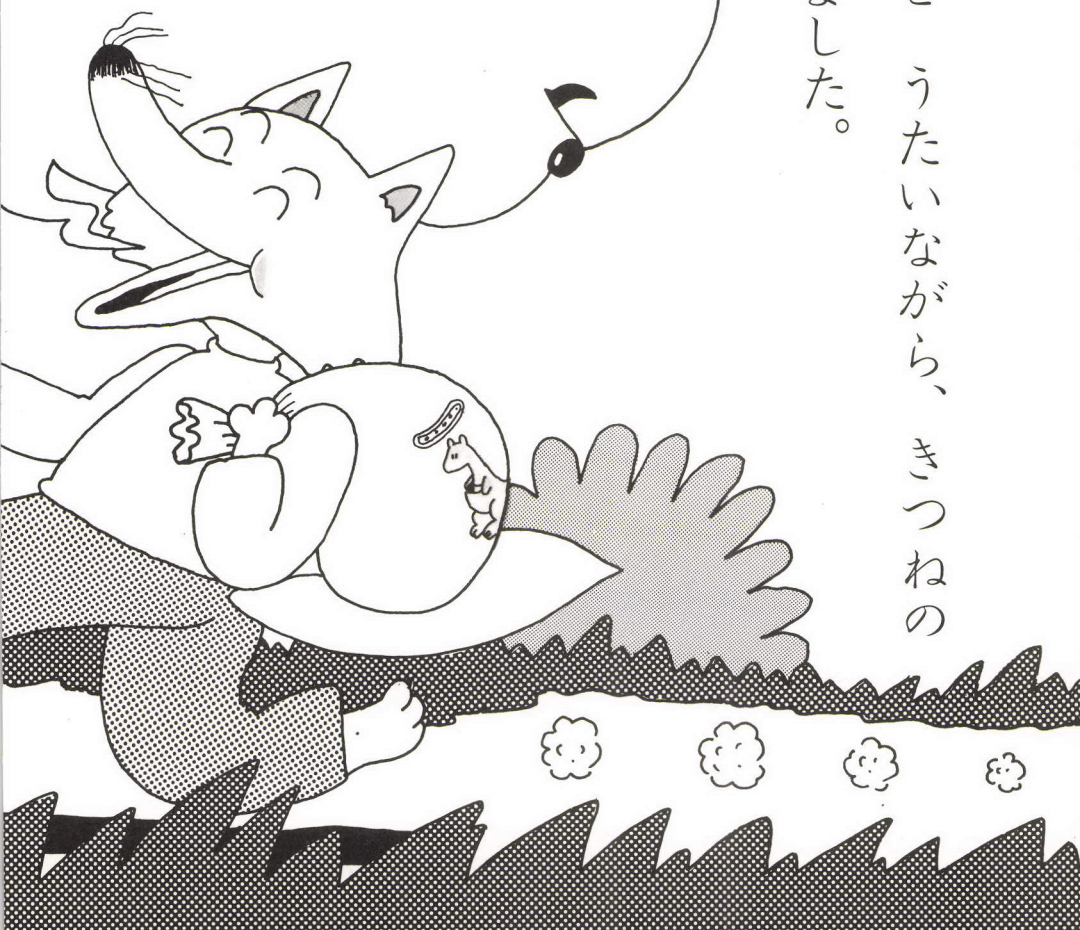
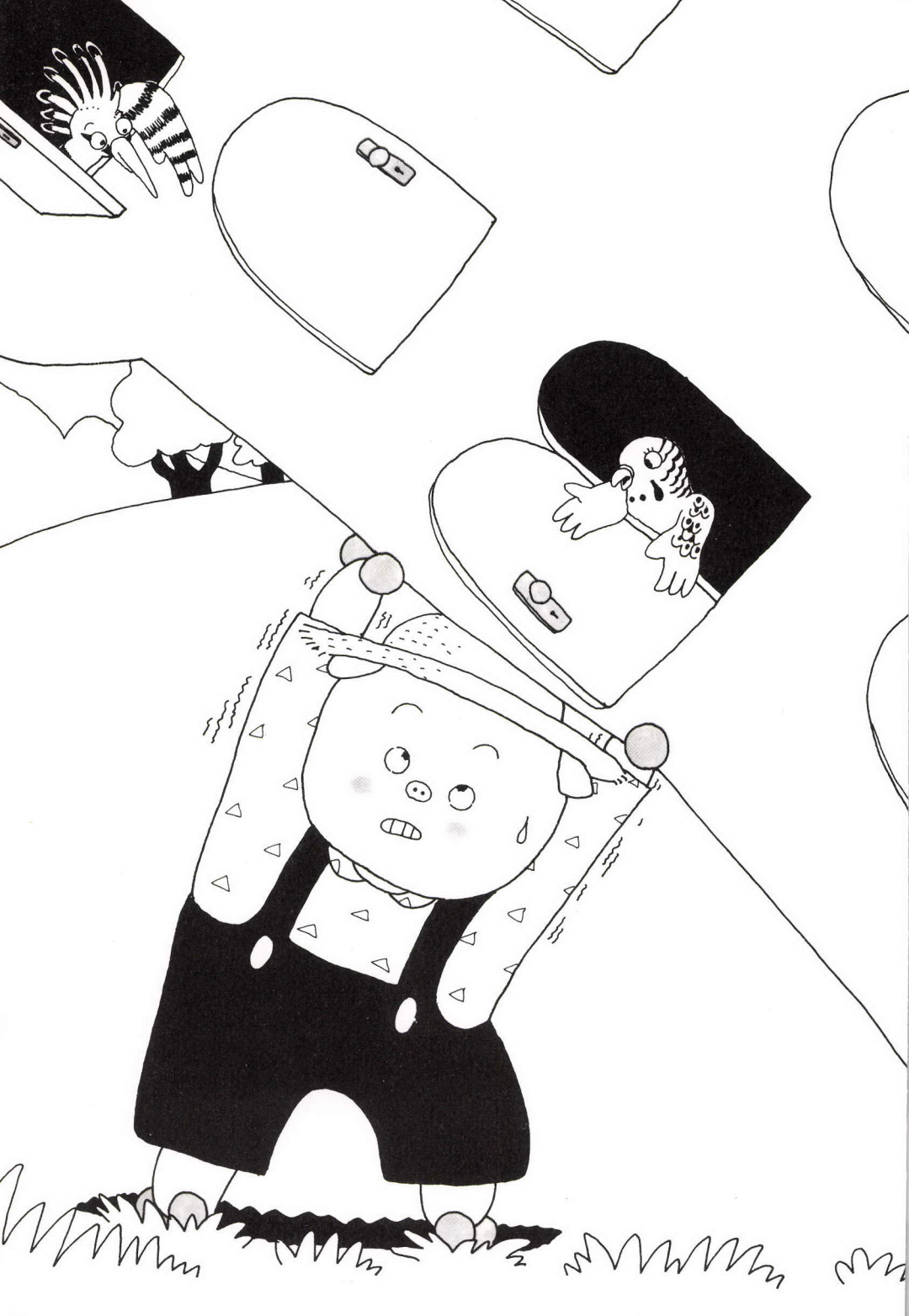
ペチャおばさんと　クチャおばさんは、そういいあいました。

「みなさん、どう　なさったのですか？」

「う――ん、う――ん、しびれる――。」

ポイポイが、かおを　まっかに　して　うなってて

カンガルーこそ
あたらしい

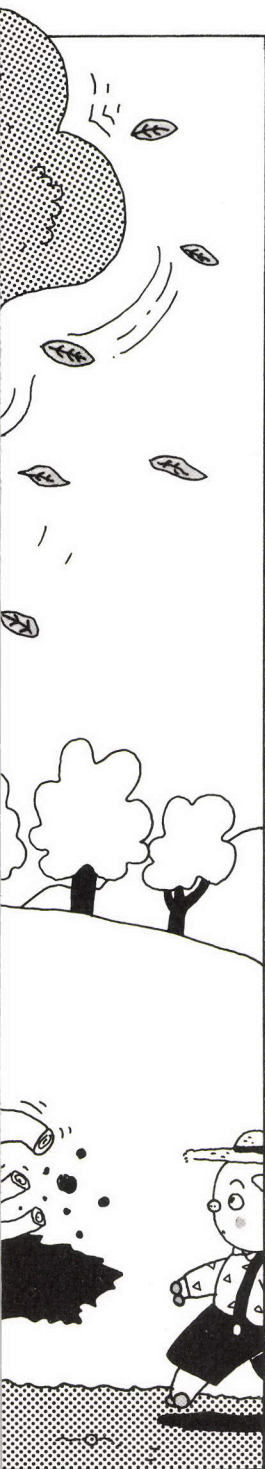
のんびりと　うたを　うたいながら、きつねの
ゾロリが　やってきました。

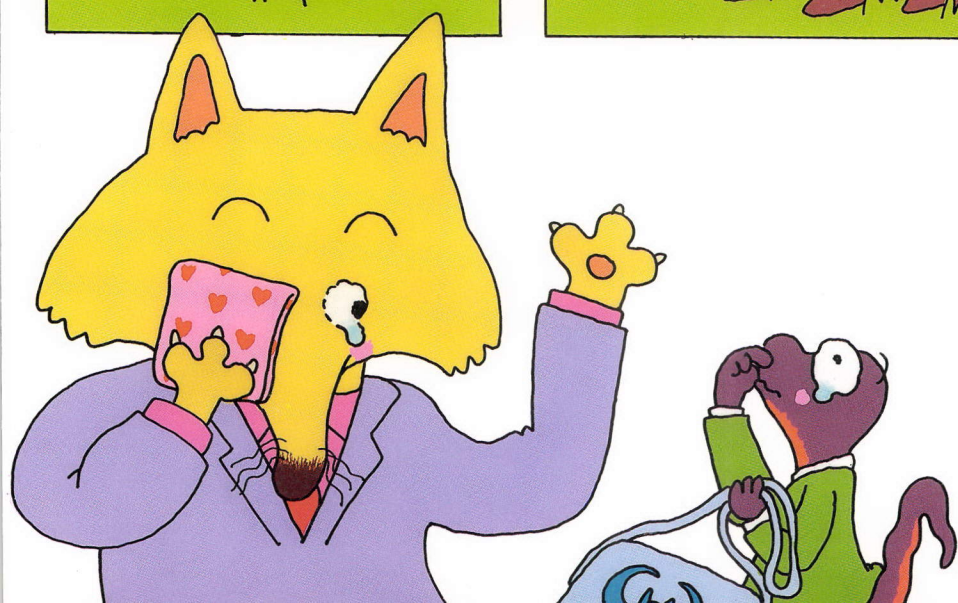
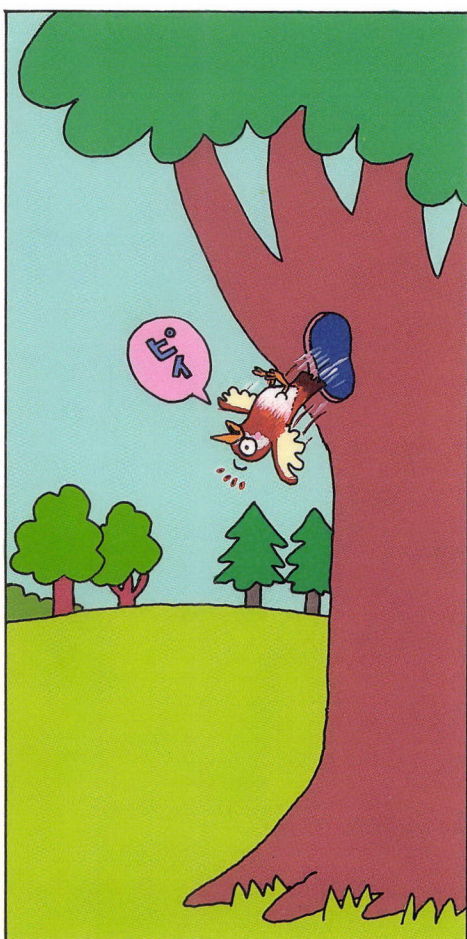
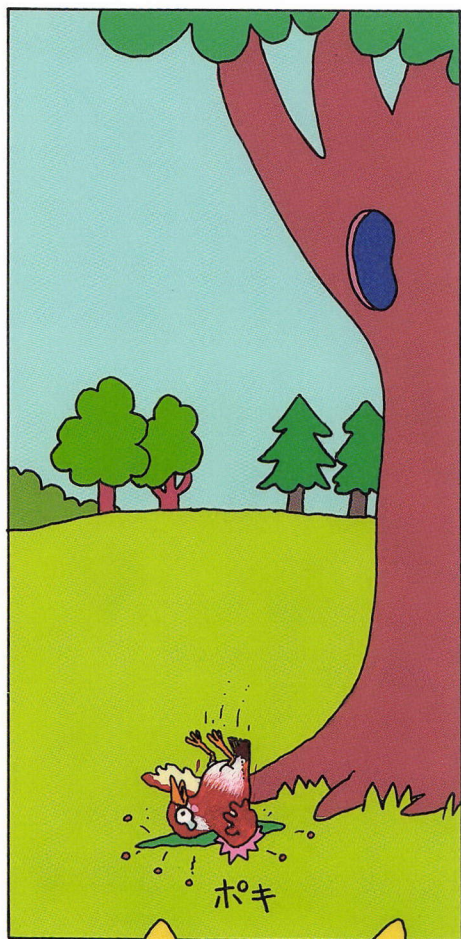
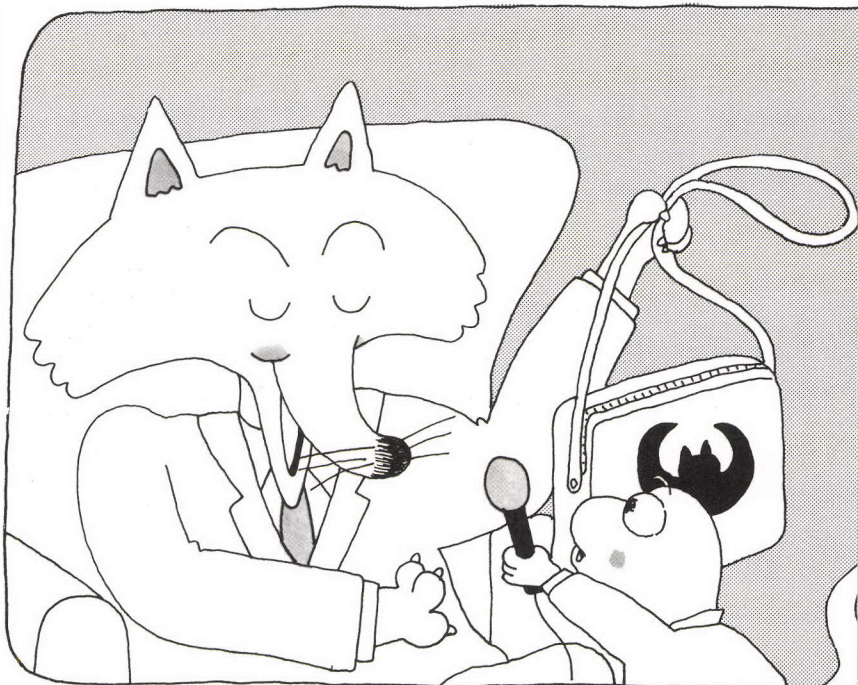
えっさ　ほいさ
きつねの　ゾロリは
よい　きつね
ほい　さっさ
おさるの　かごやは
もう　ふるい

「うーん、ぼくが　ささえている　あいだに、はやく
にげてよ。」
「だめよ。たまごが　あるもの。たまごは　いつも
あたためておかなければ、ひなに　かえれないのよ。
たまごを　おいては、にげられないわ。」
いんこの　クチャ（くちゃ）おばさんが　いいました。
「どうしよう。ああ、だんだん　うでが
しびれてきた……。」
そのときです。

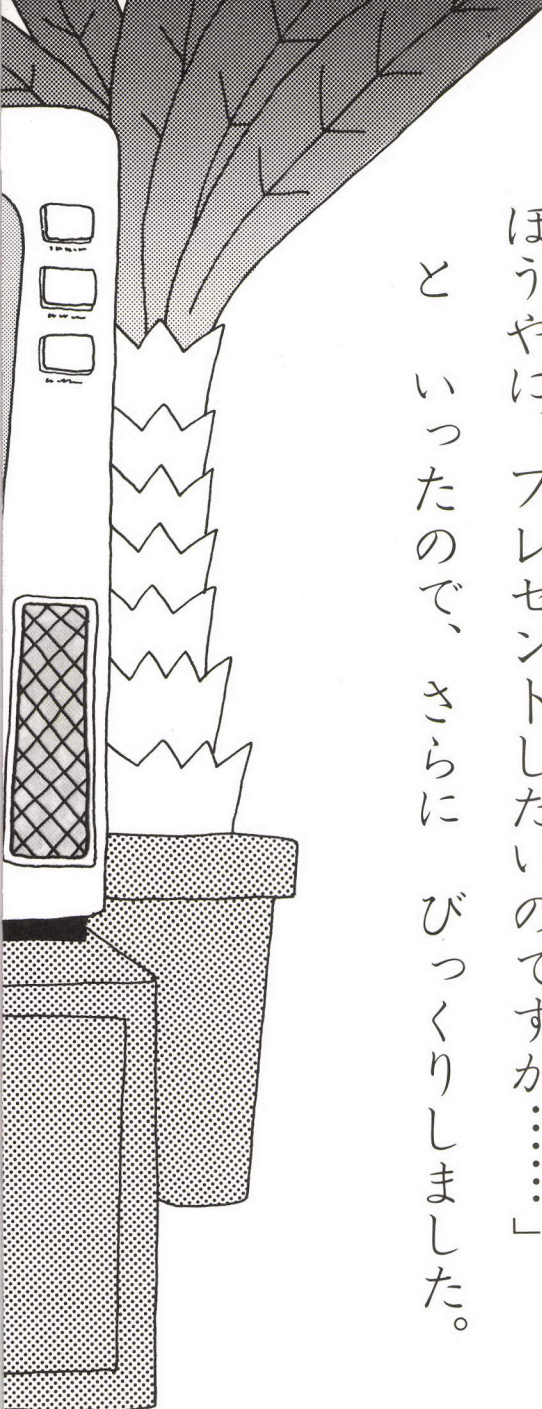
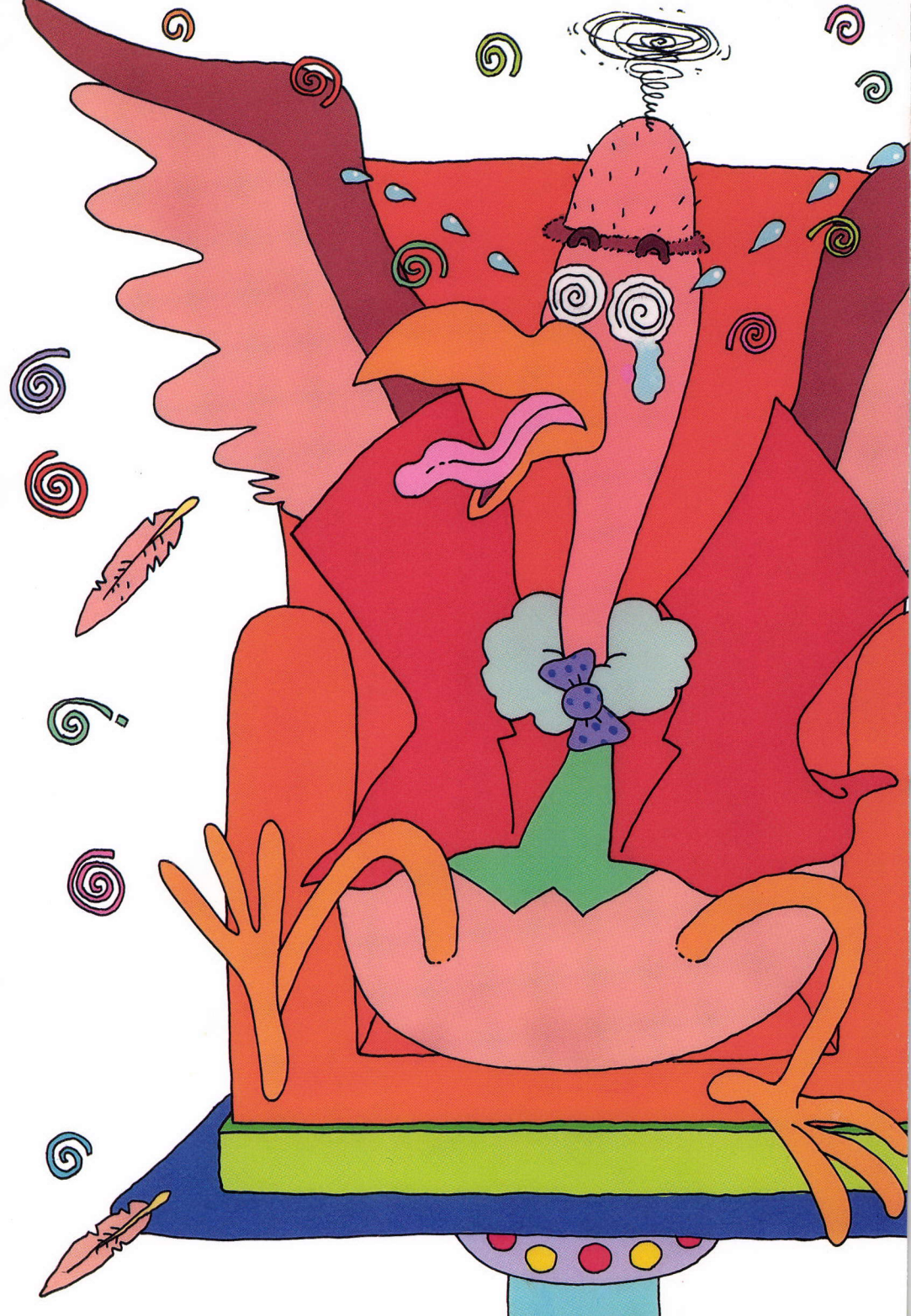
ピイチク町
町えいアパート

ちょうど　ポイポイが　木のしたを　とおりかかった
とき、また　大きく、木が　ゆれました。
「キャアーーッ、たすけて　ポイポイ、すのなかには、
たまごが　あるのよ。おちたら　われてしまうわーっ。」
しじゅうからの　ペチャおばさんが　さけびます。
「よーし、おちついて、ぼくが　ささえてあげるよ。」
ポイポイは、じぶんが　つっかえぼうに　なり、
がっしり　木を　うけとめました。

ピイチク町
町えいアパート

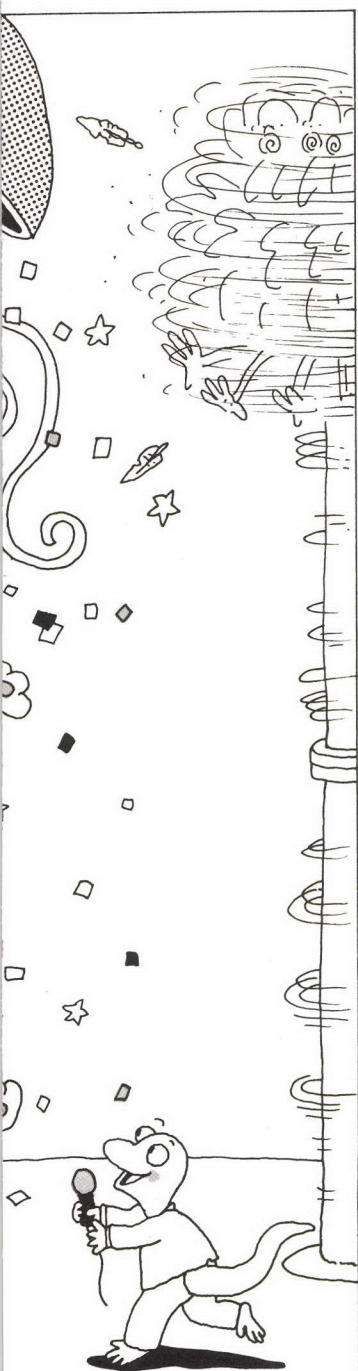
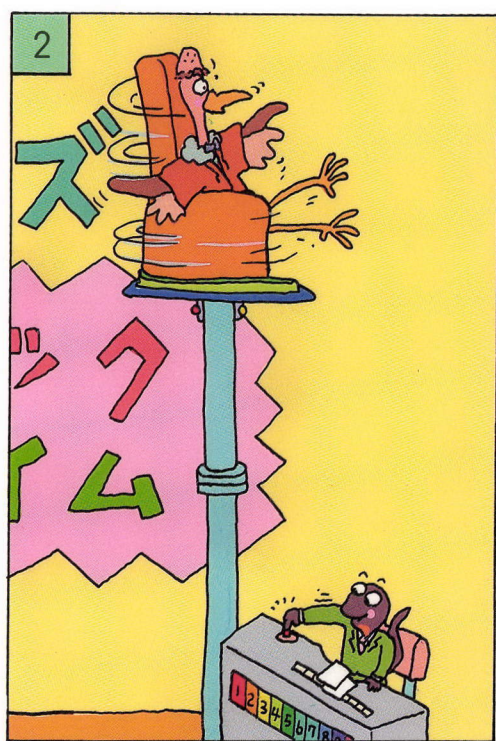
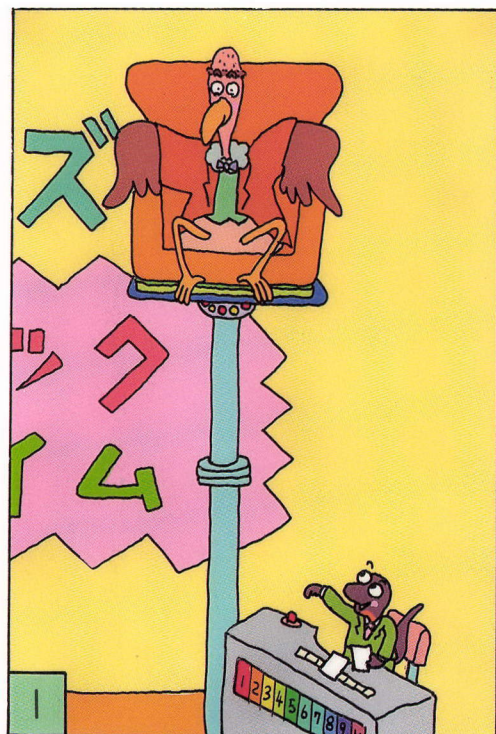
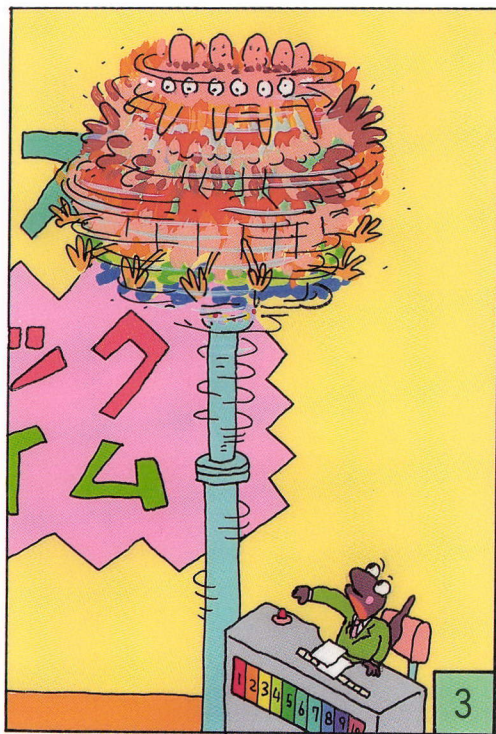
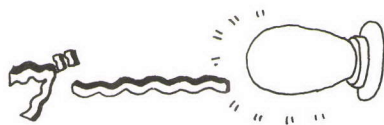
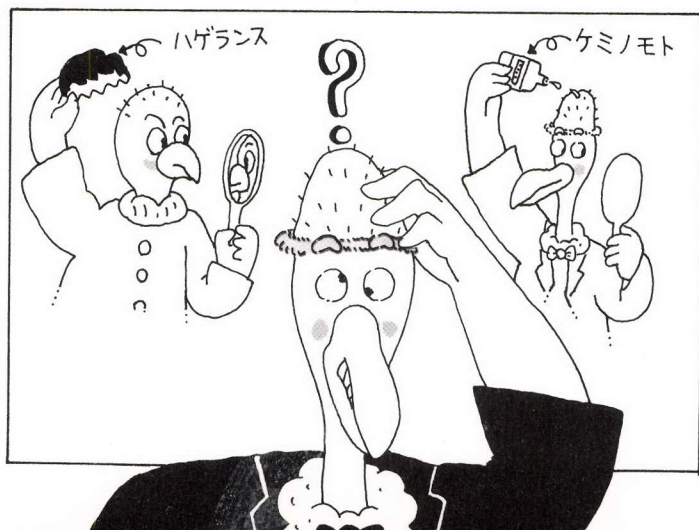
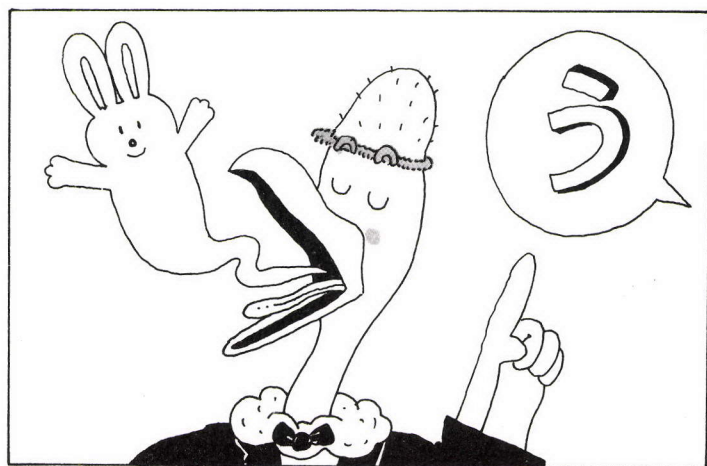
それから　しばらくして、ピィチク町の
町えいアパートが　たおれそう、という　じけんが
おこったのです。
ピィチク町の　アパートは、一本の　大きな
かしの木でした。
その　大きな　木が、ねもとから　かたむき
はじめたのです。

「パタパタぼうやは、ひなのとき、すから
おっこちて、かたほうの　はねを　おり、とべなく
なってしまったのです。だから、かわりに
いってきてほしいのです。」
ポイポイは　おもわず　テレビのまえで、
ぱちぱちと　はくしゅしました。
じぶんのことばかり　かんがえている　ひとが
おおいのに、なんて　りっぱな　きつねでしょう。

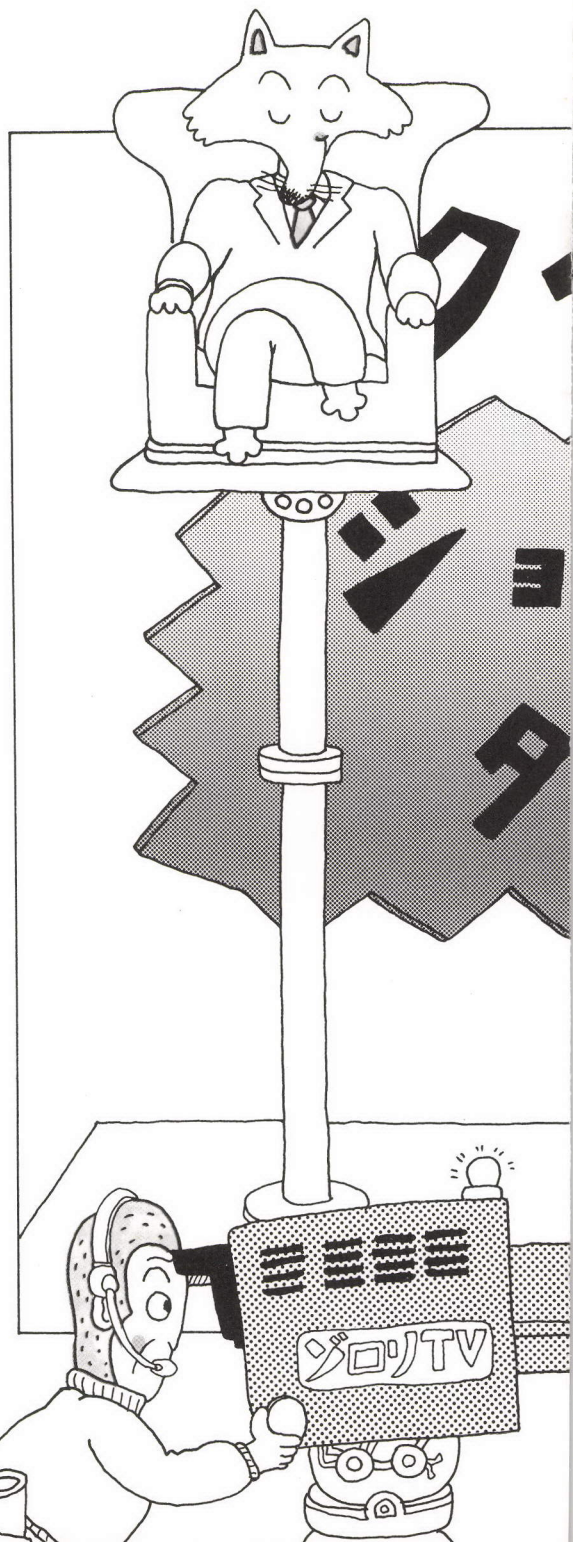
ピィ
ポキ

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
U
KOBUTA DENKI

テレビを　みていた　ポイポイは、
「めちゃくちゃな　もんだいだなあ。」
と、びっくりしてしまいましたが、ゾロリが、
「あのう、ハワイりょこうは、むくどりの　パタパタ
ぼうやに、プレゼントしたいのですが……。」
と　いったので、さらに　びっくりしました。

「なぜだ――っ！」
はげわしが　ききますと、
「外国に　いけば、〃やまだ　ひろし〃という
ひとは、〃ひろし　やまだ〃と　なりますね。
だから、〃はげ　わし〃さんは、〃わし　はげ〃
つまり、わしは　はげだと　なり、かくせません。」
「ビエ――ン。」
はげわしは、ないてしまいました。

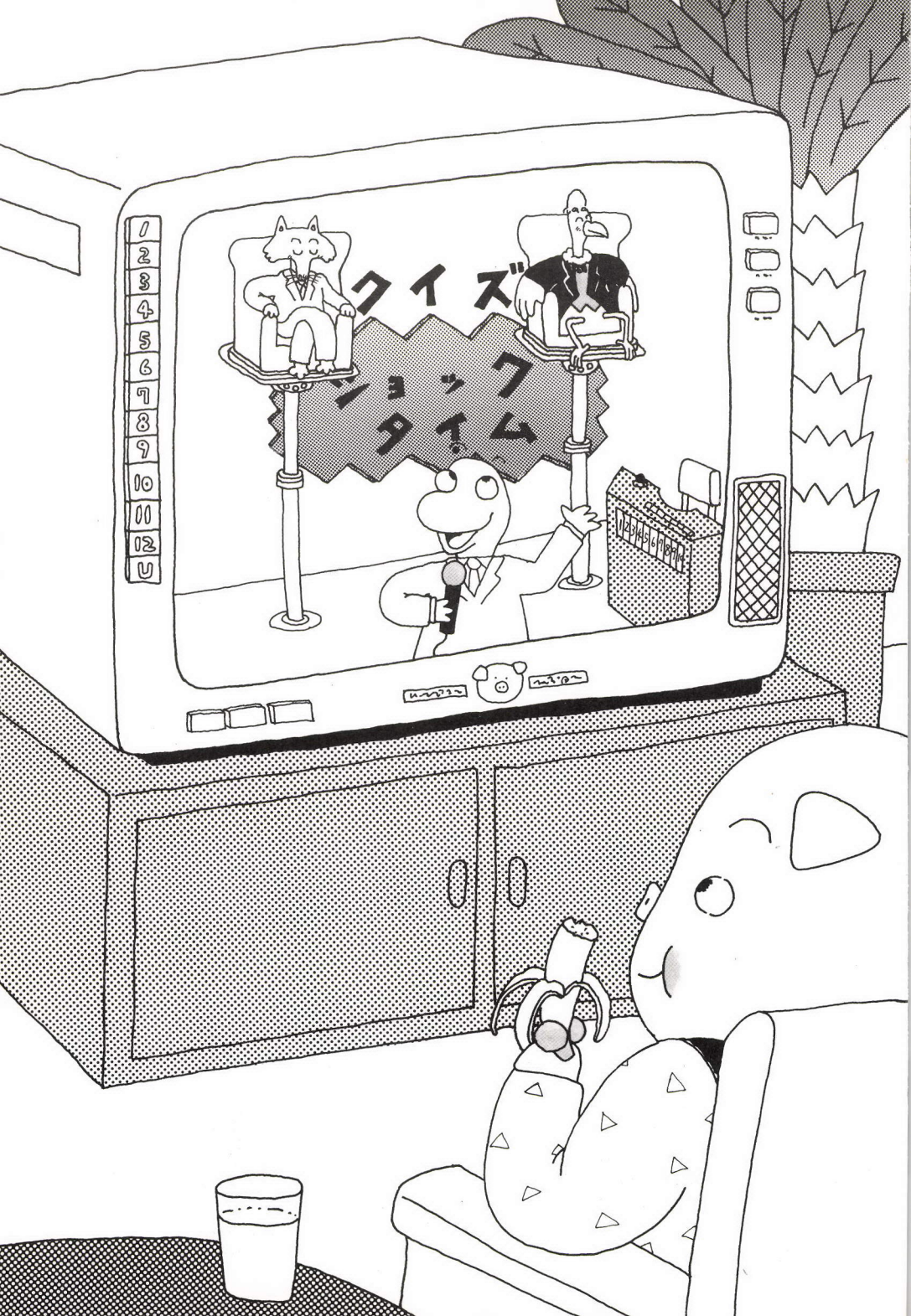
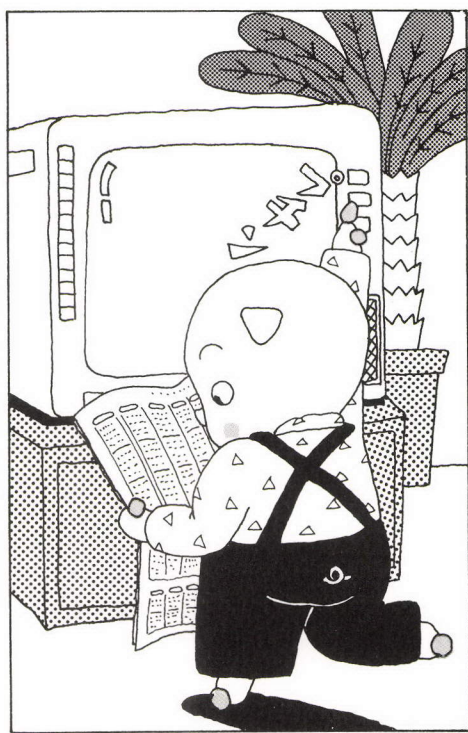
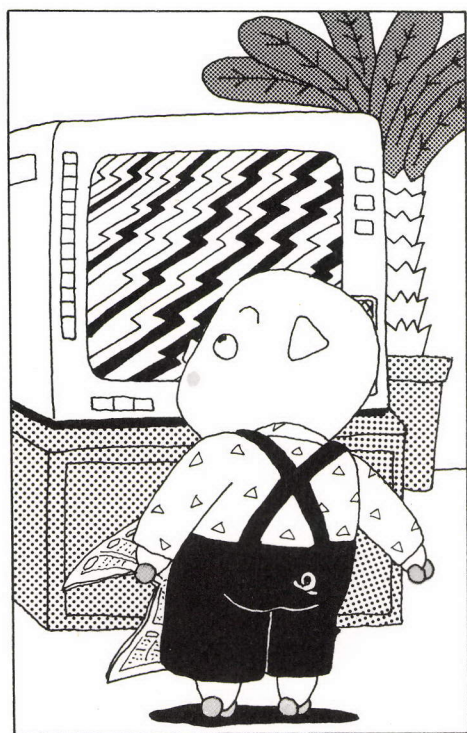
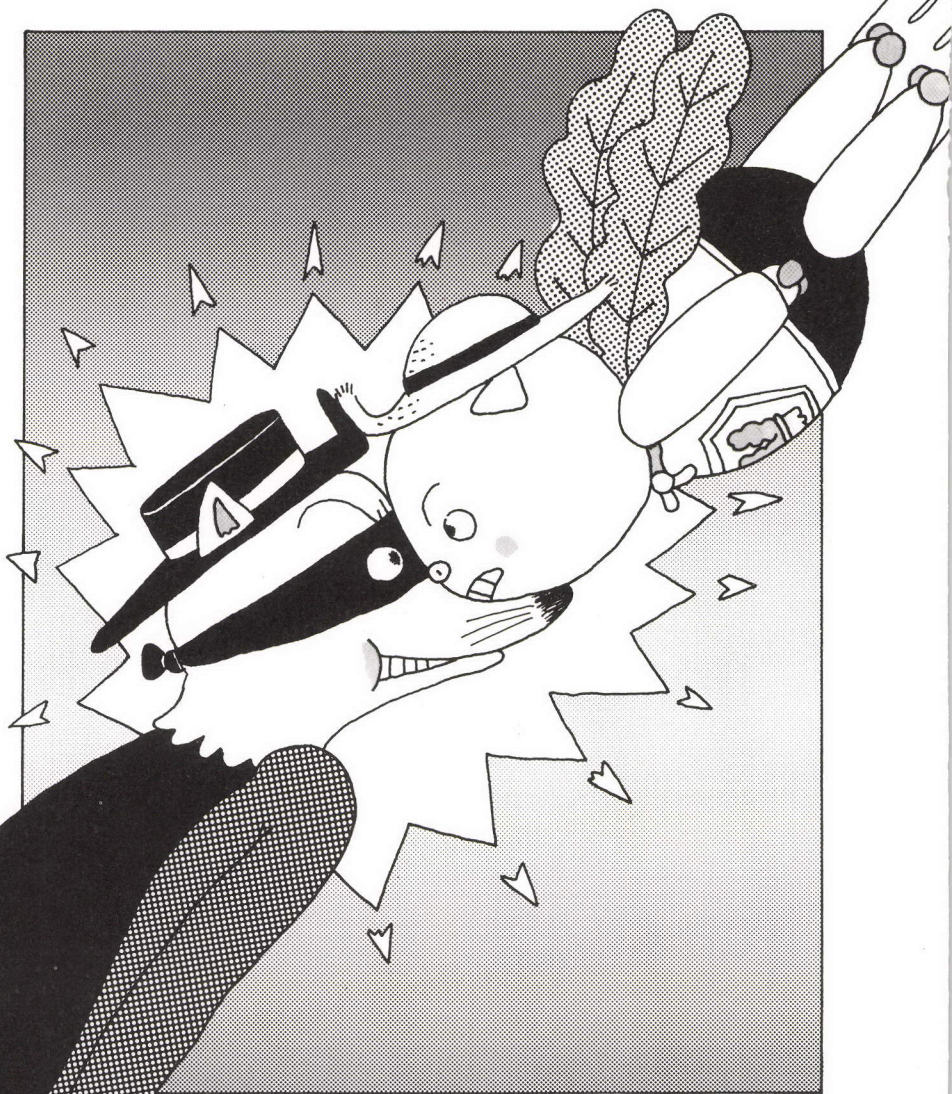
「そのとおりです。 おめでとう ゾロリさん。
あなたが ハワイりょうこうに きまりました。」
いもりは にっこり わらいました。

「のこった　ゾロリさんに、　おなじ　もんだいです。
さあ、どっち？」
こたえは、二つのうちの　一つなのですから、
はげわしで　なければ、はげたかに　きまっています。
「はげたか……じゃ　ないでしょうか。」
と、ゾロリが　こたえると、

1
ズ
ク
イム
2
ズ
ク
イム
3
ク
イム
4
ク
イム

はげわしは　いちかばちか、
「はげわしっ！」
と、こたえました。
ブー
と、ブザーが　なりました。
「ざんねんでした。いすが
まわりますが、とべるかたも、おとびに
ならないよう……さようなら――」。
いもりが　手を　ふりました。

「きりんの　なき声は、どんなでしょう。」
とか、やさしい　しつもんばかり　だったのです。

「もんだいです。 はげわしと はげたかでは、
どちらが はげを かくしやすいでしょう？」
「……うーん。」
はげわしは、あんまり いっしょうけんめいに
かんがえたので、七めんちょうのように、赤く
なったり 青く なったり しています。
いままでの もんだいは、
「〃う〃で はじまる どうぶつの なまえは？」
とか、

「こんどが　十もんめです。　これで　ハワイりょこうが
きまります。」
ポイポイも　じぶんのことのように、　どきどき
してきました。

「さあ、いままでに　九かい　ただしい　こたえを
だしたかたが、いらっしゃいます。はげわしさんと
きつねの　ゾロリさんです。」
テレビの　しかいしゃの　いもりが、いいました。

クイズ
ショック
タイム

ぶたの　ポイポイが
テレビの　スイッチを
いれますと、クイズを
やっていました。
ただしい　こたえを
十かい　だせば、ハワイ
りょこうが、プレゼント
されるのです。

へんし〜ん ほうれんそうマン

みづしま志穂 さく★ 原 ゆたか え

へんし〜ん
ほうれんそうマン
みづしま志穂 さく ★ 原 ゆたか え
わっはっは
ピューン